SANSEIDO
ENGLISH TEACHING

三省堂
高校英語教育

2014年 夏号

巻頭エッセイ

Beyond Borders : 英語を手に、境界線のその先へ踏み出す　瀬谷ルミ子 ……… 1

特集

1 新教科書 Part 3
2 教科書でつける「英語の基礎力」

- CROWN English Communication Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの編集を終えて　霜崎　實 ……… 2
- MY WAY English Communication Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの編集方針　森住　衛 ……… 6
- 読解重視型 vs. コミュニケーション志向の英語教育を考える　霜崎　實 ……… 10
- 伝わる英語を発信するための文法力　飯野　厚 ……… 13
- 基礎力の定着を目指して　金子朝子 ……… 16
- 理系学生に求められる英語コミュニケーション能力　松原好次 ……… 19
- 留学英語プログラムから英語の基礎力を考える　飯田　毅 ……… 22
- 英語アレルギーを克服するために　井上　徹 ……… 25

2014年度センター試験の分析と対応　渡辺　聡 ……… 32
シンガポール便り　村井佳世子 ……… 表紙裏
表紙写真について　岩佐洋一 ………… 表紙裏

SANSEIDO

連載コラム
シンガポール便り

躍動する幸福の国？

日本大学　村井佳世子

ゴールデンウィークに三泊でシンガポールに出かけた。知人に会うことと休養が目的で観光はあまりできなかったが、21 年ぶりのシンガポールは大きな変貌をとげており目を見張るものがあった。

まずチャンギ国際空港に到着してその規模と整備された新ターミナルに驚かされる。空港内部は広すぎて目をこらしても先が見通せない。通路がどこまでも永遠に続いているように見える。都市中心部へ向かう道路や建物のスケールは大きい。シンガポールの新しい名所としてすでに名高いマリーナ・ベイ・サンズ（写真）は言うに及ばず、滞在中に訪れた郊外の住宅地の美しさや高層団地群、整然とした道路や交通網など、整備されたインフラに目を奪われる。国全体の面積は東京 23 区と大体同じくらいというが、人口が少ないとは言え、空間の使い方が贅沢で豊かに見える。

繁華街に出かけると、週末のせいか人出が多く賑わいを見せている。若者や家族連れの人々の顔の表情は明るい。なんだか町全体が一つのアミューズメントパークのようで、そこで人々が豊かな生活を謳歌しているように見える。気になる若い人たちの表情は、元気で楽しそうだ。シンガポールは人種・宗教・言語が多様で複雑だが、互いの軋轢や所得格差による生活苦や不満はないのか。そんな疑問を抱いたが、それどころか近年は海外からの移住者が急増し多様性が増しているという。日本から生活拠点をシンガポールに移すビジネスマンもいる。なぜか。

シンガポール在住の知人たちの話によると、急速な発展は国民の負担になるものだが、そうではないという。それはシンガポールが外資を積極的に受け入れているからだ。国土は小さく資源も少ないが、地理的立地の恩恵を受けて、昔から東南アジアの金融、貿易のハブとして機能し、それに加えて積極的に外国企業を受け入れる税制や緩い規制のせいで、世界のビジネス拠点となっている。世界中から人が集まるような仕組みができており、それで成り立っている国ということだ。言い換えれば多様性あってのシンガポールなのである。人種のるつぼでありながら治安がよく清潔な町。いいこと尽くしのようだが、最近は市民の不満も聞かれるという。高級車フェラーリに乗った外国人の乱暴な運転による死傷事故がきっかけで、裕福な移民に対する目が厳しくなっているそうだ。

帰りの機上で、家族とシンガポールで暮らし、これから日本へ出張という日本人ビジネスマンに遭遇した。魅力的な教育環境で不自由のない生活を送っているという彼の話を聞きながら、活力にあふれたこの国に住む人々のことを思った。

表紙写真について

ギリシャ メテオラ：天空の修道院

麻布中学・高校　岩佐洋一

ギリシャ中部、アテネから電車で揺られること 4 時間半、目の前に奇石群が広がってくる。その岩の上に屹立する修道院が 6 つ、それが世界遺産にも登録されている「メテオラ修道院群」である。

今でこそ観光客にも解放されている修道院群だが、かつては修道院に行くための橋や階段など一切なく、縄梯子と滑車に吊るした網袋だけが下界とつながる手段だったという。そもそもこの写真のような独立した岩山の上に修道院を建設すること自体が想像を絶する。これらの修道院から下をのぞき見るだけで高所恐怖症の私はかなり足が震えた。こんなところに、立派な修道院を建て、そのうえ縄梯子しか行く手段を設けないなんて「修行のためとはいえやり過ぎではないか。」と驚くばかりだった。

実際、少なくない数の修行僧が転落死してきた歴史があるそうだ。修道院内の宗教画は殉教者、殊に残酷な死に方を描いているものも多い。かつてここで暮らしていた修道僧には同じような覚悟が求められていたのだろう。それでも 15,16 世紀の最盛期には修道院が 24 もあったそうだ。

現在でもギリシャ北部自治州聖山アトスでは、このような伝統を継承する修行僧が俗界との関わりを断ち、日夜厳しい修行生活を送っている。山とは言っても 385 平方 km の広大な土地にいくつもの修道院や修行小屋が点在していて、入山には予約と許可証が必要となり、「女人禁制」ゆえ女性の入山は許されていない。

「ギリシャの支配的な宗教は、キリスト教の東方正教会である。」という条文がギリシャ憲法にあることをご存知だろうか。「信教の自由」を認める条項も別にあるそうだが、政教分離の国日本から来た私には新鮮な驚きだった。だからこそアトス半島のような広大な土地すべてが聖地として認められているのだろうと納得もできた。

従って、ギリシャの義務教育では当然のように「宗教」の時間があり、東方正教会の教理や歴史を子供たちは全員学ぶそうだ。とは言え厳しい戒律とは無縁のようである。メテオラに来る車中、男子中学生 4 人とコンパートメントに乗り合わせた。彼らはいたってフレンドリーで、かなり下手な英語でも臆さずどんどん話しかけてきた。下車後、道案内まで買って出てくれた。嬉しい反面、「外国語でコミュニケーションを積極的にとる姿勢」では日本の中学生は完敗だな、と教員として多少反省した次第である。（まあ、ワールドカップブラジル大会ではギリシャに完勝するでしょう。）

巻頭エッセイ

Beyond Borders：英語を手に、境界線のその先へ踏み出す

認定NPO法人
日本紛争予防センター理事長　瀬谷ルミ子

◉プロフィール：群馬県生まれ。中央大学総合政策学部卒、英ブラッドフォード大学紛争解決学修士号取得。国連PKO、外務省、NGO職員として、ルワンダ、アフガニスタン、シエラレオネ、コートジボワールなどで勤務。2007年に日本紛争予防センター事務局長に就任後、ソマリア、南スーダン、ケニア、スリランカ等の現地事業を統括。2013年7月より現職。ニューズウィーク日本版「世界が尊敬する日本人25人」、日経ビジネス「未来を創る100人」等に選出。2013エイボン女性年度賞大賞受賞。著書は「職業は武装解除」（朝日新聞出版）。

英語は、コミュニケーションのための「道具」だ。より高い目標を目指すほど、よく磨きあげられた道具が必要になる。腕の良い職人が一流の道具を使い、日々丁寧に手入れをするように。同時に、使い手が道具を何のために使うのかという「目的」を持ち、自らの能力や専門性を高め、腕を磨くことがまず必要だ。

世界は急速に変わりつつあるとよく言われる。世界で生き抜くために日本も国際化が必要で、そのためにグローバルな人材を育成することが求められている、とも。

グローバル化のためには英語という道具が不可欠なのは確かだ。しかし、英語だけでグローバル化が進むわけではない。そもそもグローバルな人材ってなんだろう？

私は、「ボーダレスに活躍する力」を持つのが、グローバルに活躍する人材だと考えている。ここでいう「ボーダレス」で越える「ボーダー（境界線）」は、二つの意味がある。

一つ目は、国を分ける「国境」を越え、世界の多様な文化、民族、社会性のなかで自らの居場所を見つけ、柔軟に立ち振る舞うことだ。2014年現在世界第三位の経済力をもつ日本は、ある予測では、2050年の世界では第8位になっているという。日本のひとつ前の第7位がインドネシアで、日本とほぼ横並びの第11位はアフリカのナイジェリアだ。いま日本にとって途上国とされている国々や遠い存在のアフリカ諸国が、日本と横並びの水準に発展するくらいに、すでに世界は急速に動いているのだ。日本国内で自分に何ができるのか悩んでいる人もいるが、これら多くの国々で、日本で当たり前の技術や職業が新たに必要とされ、日本の外に出るだけで貴重な専門家として重宝されることもあるのだ。

二つ目は、業界や分野、組織の間にある「垣根」を越え、現場のニーズに対して成果を出すことだ。私は紛争解決に役立つことがしたくて、20歳のときにアフリカのルワンダを単身訪れた。そして、自分が現地では「日本人」の「大学生」である肩書以外に何も持たないこと、役立つには所属や肩書に関係なく、身一つで現場の問題を解決するスキルが必要だと痛感したのだった。その悔しさから、紛争解決という専門を手に、国連、外務省、NGOなど組織を問わず経験を積み、成果を出すことを20代から目指した。そのお陰で、今では組織ごとの違いを踏まえたうえで、協力しあって現場の問題を解決できるようになったと思っている。

ボーダレスに活躍するために必要なのは、自らの腕を役立てる場を求める意志、英語という道具、そして最初の一歩を踏み出す行動力だけだ。

そのうえで、自分をある段階まで導いてくれる人の存在もとても重要だ。私が人生で影響を受けた人は多いが、最初の存在は高校の英語担当のＹ先生だった。英語がもともと得意だった私だが、高校生になると留学経験者や帰国子女など、自分以上に英語を身につけた人たちがいることを知り、日本で勉強するしかない自分が授業から学べることは限られているとあきらめ気味になった。そのような時に、通常の授業や参考書では扱わないような私の数々の疑問や質問を、時には何週間もかけて調べて必ず答えてくれたのがＹ先生だった。数十年経った今でも、その内容や答えを覚えていて、現場で英語を使用する時にふと思い出すこともある。

私がＹ先生に信頼を寄せ、さらに英語を頑張って勉強するようになった理由が、今ではよくわかる。先生は、「教員」としての最低限の役割をこなすためではなく、英語という専門性を持つ一人の人間としてのこだわりや熱意を持って、生徒に向き合ってくれていた。高校生だった私が、肩書に関係なく目の前のニーズに応えてくれた先生に影響を受けたように、自分も紛争の現場で接する人々に対して、同じ存在でありたいと思っている。

特集1　新教科書 Part 3

CROWN English Communication Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの編集を終えて ～もう一歩先を行く教科書を目指して～

慶應義塾大学　霜崎　實

1. はじめに

『CROWN English Communication Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』のシリーズが完成を迎えた。新学習指導要領のもとに、内容・形式ともに一新し、基礎的なレベルから高度なレベルに至るまで、段階的に到達することができるように配慮した教科書の完成である。『Ⅰ』では基本をしっかりと導入し、『Ⅱ』では高校生として到達すべきレベルを目標とし、さらに『Ⅲ』ではより高度な内容を盛り込み、入試レベルの英語にも対応できるものとなった。本稿では、シリーズが完結をみたこの段階で、その編集方針ならびに特長などについて述べてみたい。

2.『CROWN』シリーズの編集方針

語彙や文法の習得は、英語学習の重要な基礎となることは言うまでもないが、「ことばの教育」は「内容」と切り離すことができない。ことばの教育にとって重要なのは、ことばで何を伝え、何を考えさせ、どのような心の変化をもたらすことができるのか、という点である。題材に登場する人物の経験やものの考え方や感性に触れることで、新たなものの見方や価値観を獲得したり、さらには人生における重要な選択をするきっかけとなることさえある。そのためには、生徒の心に届く内容をもった題材を提供することが、英語教科書にとっての生命線であるといっても過言ではない。

「よい題材」とは何か? この問に対して、これこれの条件を備えていればよい題材となる、と明確に答えることはできない。しかし、良い題材を選定するための暗黙の了解のようなものが編集委員の間に共有されているように思う。そうした了解事項がいかなるものかと問えば、第1に、高校生の心に共感と感動をもたらすものという点が挙げられる。いわば、読んでいくうちに引き込まれるような内容をもっていることである。とりわけ『Ⅰ』レベルでは、そうした要素が入ることで英語学習への心理的な障壁を取り除き、学習意欲を高めることに繋がる。

第2に、高校生の知性に働きかけて、問題を観察したり、分析したり、解釈したりするような知的刺激を与える題材が望ましいという点が挙げられる。教科書はとかく規範的な立場から正しいことや事実のみを精選して提供していると捉えられがちである。しかし、ことばの教材に関しては、「教科書に書いてあることは常に正しい」といった思い込みは、無批判に内容を鵜呑みにするという悪癖に繋がる。教科書といえども、批判的に読んで考える習慣をつけることは、思考力の養成にとってきわめて重要である。強引に結論を押し付けるのではなく、問題発見を促すような提示の仕方が求められる。

第3に、現代に生きる若者ができるだけ広い視野に立ち、提示されている問題をさまざまな角度から捉えることができるよう、多様性に富んだテーマを扱っていることが望ましい。しかし、単に多くのテーマを扱えばよい、というものではない。選択されたテーマに対して複数の角度からアプローチすることによって、問題をより深く理解することができるような構成になっていなければならない。

以上を要約すれば、『CROWN』のシリーズを一貫して貫いている編集方針は<題材中心主義>と言えるのかもしれない。題材の良し悪しは決定的であると考えるがゆえに、編集委員会では、持ち寄った題材候補を十分に吟味し、厳選された題材について、語彙・文法のフィルターをかけ、さらに文章として洗練されたものにするために、労苦を惜しまない。このことが、『CROWN』シリーズに対する大きな信頼に繋がっているものと確信している。

3. 共鳴し合う題材

前節では、英語学習にとってテーマの設定と問題への多角的なアプローチがいかに重要であるかについて述べた。同じテーマであっても、さまざまなアプローチ、さまざまな問題の切り口がある。『CROWN』シリーズでは、いわばスパイラル的に理解が進むように、切り口を変えつつ、テーマの重層的な扱いに配慮した構成となっている。関連した題材が「共鳴し合う関係」を作り出し、生徒が知らず知らずのうちに新たな気づき（awareness）を経験できることを期待しているのである。

以下、シリーズを通して扱ったテーマの中から「言語」「環境」「科学」「社会的な貢献／平和への貢献」「生き方／人生」を例にとって、重層的な提示の具体例を見ておくことにしよう（＊以下、レッスンのタイトルに続く括弧内にあるⅠ, Ⅱ, Ⅲはそれぞれ教科書の『Ⅰ』『Ⅱ』『Ⅲ』を表し、「L. ～」は「第～課」を表す）。

まず、「言語」というテーマについては、“Writers without Boarders”（Ⅰ, L.3）➡“Txtng―Language in Evolution”（Ⅱ, L.5）➡“Being Bilingual”（Ⅲ, L.7）という繋がりを見て取ることができる。それぞれ、言語と文化の境界を超えて活躍する作家たち、携帯電話で使われるようになっている新たな言語の特徴、二言語併用社会の実態などについて、「言語」を接点として語っている。

「環境」に関しては、“A Forest in the Sea”（Ⅰ, L.2）➡“Roots & Shoots”（Ⅰ, L.6）➡“Why Biomimicry?”（Ⅱ, L.7）➡“Green Revolution, Blue Revolution”（Ⅲ, L.8）のような繋がりがある。それぞれ一見別のテーマのように見えながら、実は、「環境」とわれわれの生活のあり方との関係性を追求したものである。

「科学」という切り口からも、いくつかのレッスンが連携している。“Going into Space”（Ⅰ, L.1）➡“The Long Voyage Home”（Ⅱ, L.9）➡“The Magic of Reality”（Ⅲ, L.6）は、宇宙飛行士若田光一さんの体験、宇宙探査機はやぶさについての物語、そして科学的な思考のあり方をそれぞれ扱っている。

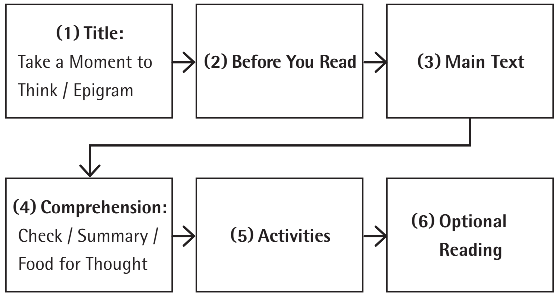
「社会的な貢献／平和への貢献」という観点から共通の接点をもつものもある。“Food Bank”（Ⅰ, L.5）➡“Crossing the Border”（Ⅱ, L.4）➡“Before Another 20 Minutes Goes By”（Ⅱ, L.8）➡“Only a Camera Lens between Us”（Ⅲ, L.5）などがそれである。特に、“Crossing the Border”は国境なき医師団に参加した貫戸朋子さんの活動を、“Only a Camera Lens between Us”は国際紛争地域で働く瀬谷ルミ子さんの活動を紹介したものであるが、ともにグローバルな舞台において活躍する女性の国際貢献活動を扱ったものである。

「生き方／人生」について考えさせるレッスンもある。例えば、常に弱者への視点を忘れない『ピーナッツ』の作者チャールズ・シュルツ氏を扱った“Good Ol’ Charlie Brown”（Ⅰ, L.10）、アフリカの最貧国において廃品を利用して風力発電機を作り上げた少年を扱った“A Boy and His Windmill”（Ⅱ, L.1）、心臓外科医天野篤さんの一途な姿勢の背後にある想いに焦点を当てた“God’s Hands”（Ⅲ, L.3）～ スティーブ・ジョブズ氏が人生において何が大切なのかを若者に語った“Stay Hungry, Stay Foolish”（Ⅲ, L.10）などは、それぞれアプローチは異なるものの、人間の生き方の根本を問う内容となっている。

この他にも、「芸術」「歴史」「伝統文化」「情報化社会」「スポーツ」「デザイン」など、多様なテーマのもとに、新鮮で知的刺激に満ちた題材を豊富に取り扱っている。英語という教科の面白さは、教材を通じて、自分の内面を深く見つめたり、あるいは広く世界へ眼を向けたりする経験をもつことができるという点にある。『CROWN』シリーズの最大の魅力の一つは、こうした経験を誘発するような高品質の題材が豊富に提供されているところにある。

4.『CROWN English Communication Ⅲ』の特長とは?

さて、本節では『CROWN』シリーズの締めくくりである『Ⅲ』の特長について述べておきたい。『Ⅲ』は、先行して刊行された『Ⅰ』『Ⅱ』とは基本コンセプトにおいても、レッスン構成においても異なっている。先行する2冊は、文法シラバスに則り、高等学校レベルの英語の基礎力をつけることに重点をおいた構成になっているのに対して、『Ⅲ』は、いわば『CROWN』シリーズの到達点を示すものでもある。したがって、取り上げた英文にはかなり高度なものも含まれている。また、練習問題などの指示文についても、すべて英文での提示とした。しかし、何よりも大きな特長はレッスン構成にある。以下、構成を図示する。



（1）まずタイトルページにおいては、レッスンのテーマに関連した大判の写真を提示するのと共に、Pre-reading活動として〈Take a Moment to Think〉で英問を提示している。質問は生徒の知識を試すものではなく、レッスンを始めるにあたって生徒の興味を刺激し、背景知識を活性化するためのものである。また、エピグラム（警句）は、そのレッスンへの意味深長なコメントとなっているので、是非味わっていただきたい。
（2）見開きの右ページには、〈Before You Read〉という比較的短いテクストが提示されるが、これは導入の役割を担っている。そのレッスンがどのような内容を扱うことになるのか、ざっと読むことでおよその見当をつけることができる。加えて、そこで使われているキーワードを英文の定義とマッチングするクイズが提供されている。英英辞典に親しむきっかけになることを期待している。
（3）本文は3～4セクションからなっており、それぞれ見開き構成である。脚注で簡単な内容把握問題が2～3題提供されているが、これは口頭でのやりとりで済ますことも可能である。各セクションの末尾には、True / False形式のリスニング問題を用意した。
（4）本文の次に、〈Comprehension〉のページが続く。まず、〈Check〉では、本文の内容理解を総合的に確認するための問題が4問提供されている。この問題については、授業に先立ってレッスン全体に眼を通し、内容理解を確認するための宿題としてやらせてみてもよい。〈Summary〉では、本文の内容を100語程度の英文でまとめる問題に取り組むが、段階的に難しくなるように配慮した。L.1-3では空所補充形式で、L.4-7では下線部分のみを部分作文する形式で、そしてL.8-10では与えられたキーワードを使って自ら文章にまとめる形式で要約を完成させることになる。最後に、〈Food for Thought〉では、生徒の思考力に訴えかけるような設問を用意した。本文の内容について生徒が自らの経験や背景知識などを参照しながら、より深く本文の内容について考えるきっかけを与えることを目論んだものである。これには解釈や内省といった高度な知的作業が必要となることを想定し、敢えて日本語の使用を前提とした形で提供している（ただし、『Teacher's Book』ではその英語版もあるので、授業を英語で行う場合には、そちらを活用していただきたい）。
（5）〈Activities〉は、『Ⅰ』『Ⅱ』にはない新しい試みである。本文の理解を前提としたうえで、生徒自身の立場から意見を述べる機会を提供したい、というのがこのセクションを設けた理由である。そうはいっても、「意見を述べよ」と指示されたところで、英語で意見をまとめる方法がわからない、という生徒が少なくないことが想定される。そこで、あらかじめ意見を誘発するような仕掛けを組み込んでおくことにした。具体的には、複数のモデルとなるコメントを提示し、これを読ませることで、「ああ、こんな見方もあるのか」「この意見は的外れだな」「この意見には大賛成」といった反応を引き出したい。そのうえで、同じページに掲載した機能表現を参考にしながら、生徒が自分なりの意見や感想を英語で表出・発信する。本文の内容に賛同する場合もあれば、反対したい場合もあるかもしれない。いずれにしても、本文を読んで字面の理解だけで満足することなく、実は、そこから本当のコミュニケーション活動が始まるのだ、という考え方から、このセクションが生まれたのである。
（6）一つのレッスンの締めくくりとして、『Ⅰ』『Ⅱ』と同様に、〈Optional Reading〉を設けた。これは本文のテーマと密接に関連した内容を扱ったものであるが、本課で導入されたテーマを別の角度から再考したり、知識の幅を広げたりすることができるような工夫が施されている。また、『Ⅲ』では、より実践的な読解力を養成することができるように、『Ⅰ』『Ⅱ』にはない内容把握問題が用意されている。いろいろな活用の仕方が考えられるが、英文は比較的平易で読みやすいものを選んでいるので、これを速読用の教材として活用するのも一案である。最後に、〈Focus on Reading〉というコラムを設けたが、そこではリーディングのためのヒントを提供している。単に漫然と読むのではなく、リーディングの「ツボ」を押さえて読むきっかけとなれば幸いである。

5. 共感を誘発する教科書

すでに述べたように、教科書の編纂にあたって編集委員会として心がけていることは、生徒の心に届く教材を提供したいということである。英語によるコミュニケーション教材を提供しようとすれば、生徒の共感や感動を引き起こすことがすべてのコミュニケーション活動の前提になると言ってもよい。さらに遡って共感の源を探れば、教科書編纂に関わる編集委員や教科書で取り上げた人々の心の中に生じた共感にまで行き着くかもしれない。ここでは、共感の重要性を示すいくつかのエピソードを紹介しておきたい。

ジェーン・グドール氏と言えば、チンパンジー研究における世界的な権威であるばかりでなく、若者の環境学習を推進する活動を世界的に展開している精力的な活動家としても知られる。筆者も言語学を専攻するものとして、動物のコミュニケーションについては強い関心を持ってきたが、そうした関心に導かれて彼女の著作に接することになった。このような背景から、グドールさんの考え方をインタビュー形式で紹介したのが、“Roots & Shoots”（Ⅰ, L.6）というレッスンである。このレッスンは多くの学校で好評を得ているようであるが、ある学校では、このレッスンで学んだことをもとに、グドールさんに直接手紙を書く企画を実施した。教科書で紹介されている有名人に対して、手紙という手段で、しかも英語を使って相手に考えを伝えるというプロジェクトである。擬似的なコミュニケーションではなく、まさにauthenticなコミュニケーションの実践例である。筆者はグドールさんの日本での講演会に複数回参加させていただいたが、ある講演会の会場では、『CROWN』を片手にグドールさんのサインを求める女子学生の姿を見かけることもあったし、また別の講演会場では、高校生のグループが先生に引率されて、英語での講演に参加していたのを目撃している。題材に対する共感があってはじめて実現したことと思われる。

教科書編纂にあたって、そこで取り上げた登場人物とのコラボレーションが実現したことも複数回あるが、これもそうした方々の共感があってはじめて実現したことである。上に挙げたグドールさんについては、〈Optional Reading〉のために、“Message for High School Students”という心のこもったメッセージを『CROWN』のために寄稿していただいた。自身のことばで語られるメッセージは何よりも力強く生徒の心に届く。また、国際宇宙ステーションで日本人初の船長として活躍されている若田光一さんからも、若者へのメッセージをいただくことができた。これは“Going into Space”（Ⅰ, L.1）の〈Optional Reading〉として掲載させていただいたが、「快適な空間の向こう」へ乗り出してチャレンジすることの大切さを訴えたもので、これにも心を打たれる若者が数多くいるに違いない。また、“Only a Camera Lens between Us”（Ⅲ, L.5）で取り上げた瀬谷ルミ子さんからも、“Design Your Own Life: A Message from Seya Rumiko”というメッセージをいただいたが、教科書の本文で読むのとは違った生の感動が伝わる力強いことばである。

また、別の形でのコラボレーションが得られたこともある“Crossing the Border”（Ⅱ, L.4）で紹介した貫戸朋子さんには、本文の編集作業の過程で実際にお会いする機会に恵まれた。高校生へ伝えたいことがあればぜひメッセージを、とご本人にお願いしたところ、教科書の57ページの結論で述べられているメッセージをいただくことができた。教科書のことばが説得力をもっているとすれば、それはもともとご本人の口から直接語られたことに端を発しているからに違いない。

6. おわりに

以上、教科書編纂にあたってのエピソードをいくつか紹介してきたが、教科書編纂の背後には、実に多くの方々のご協力があり、その結果として『CROWN』シリーズが実現しているということである。いずれの方々にも共通しているのは、人生の先輩として、自らの経験に基づいて、心からのメッセージを若者へ伝えたいという強い意志をお持ちである、という点である。編著者が意図したように、『CROWN』シリーズが生徒の英語コミュニケーションを誘発するような「もう一歩先を行く教科書」となっているとすれば、それは教科書の内容に共感し、若者を応援したいと思ってくださる善意の人々のお陰である。そうした方々の共感が生徒にまで伝わったとき、そこに本当のコミュニケーションの契機が生まれることになる。

特 集1　新教科書 Part 3

MY WAY English Communication Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ の編集方針

Ⅰ・Ⅱは「基礎・基本」、Ⅲは「応用・発展」 ―Ⅰ・Ⅱ・Ⅲに通底する豊富な題材内容―

桜美林大学　森 住　衛

はじめに

何事も全体が完成して初めてその全体を構成する部分の役割や意義が明確になります。新版 MY WAY English Communication Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（以下、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）はこの3月のⅢの見本本の作成をもって、シリーズが完結しました。本稿ではこの全体像を紹介しますが、その特長を一言で表しますと、Ⅰ・Ⅱは基礎・基本、Ⅲは応用・発展という役割分担と、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲに通底する豊富な題材内容となります。以下、この2つについて多少とも具体的に記します。

Ⅰ・Ⅱの「基礎・基本」とⅢの「応用・発展」

英語能力の基礎や応用はいろいろな諸相で考えられますが、本稿では、前者を言語材料と言語活動で、後者をリーディングスキル、大学入試、Thinking、自己表現という点でとらえてみます。

1. 基礎・基本［1］… 言語材料：語彙と文法

MY WAYは、英語の言語材料の基礎・基本を語彙と文法においています（ここでいう文法とは広義で文構造を含みます）。古今東西言われてきていますように、「語学はやはり語彙と文法」です。この2つがしっかりと身についていれば、コミュニケーションにも大学受験にも役立ちます。Ⅰ・Ⅱではこの2つの取り扱いを以下のように質、量ともに増やして強化しました。

（1）語彙：語彙力増進のための工夫

①〈Words〉（各課末）

語彙を増やすためのクイズ／ゲーム形式の問題をⅠ・Ⅱでそれぞれ10ずつ合計20の設問を配しました。

②〈Vocabulary Building〉①-④（2課ごと）

Ⅰは、品詞の区別、基本動詞の意味、接頭辞、接尾辞の4項目を取り上げ、Ⅱは、日本語と英語の対応、関連語、語のプロトタイプ、米語と英語の4項目を取り上げています。この種の扱いは主に学習参考書が担っていましたが、今回の学習指導要領の「自学自習的な要素を取り込む」という方針に合致させたものです。

③〈基本項目一覧表〉（Ⅰの巻末付録）

Ⅰの巻末では、基本項目一覧表と称して、名詞の複数形、代名詞の一覧、一般動詞の三人称単数現在形など9つの項目を列挙しています。その仕方も、たとえば、名詞の複数形に見られるように、基本形、応用形、不規則形と非常に丁寧な扱いをしています。

④ 日常生活基本語彙と精神生活基本語彙

語彙の基本は、具象的な日常生活基本語彙だけでは済まされません。抽象概念を表す精神生活基本語彙も必要で、この点でMY WAYは、いわゆる上位校に使われる教科書にも遜色がありません。実は、これが後半で述べる題材の豊富さに連動しています。

（2）文法：丁寧な説明と必要な繰り返し

①〈Starter〉（Ⅰの冒頭）

この文法の扱いでMY WAYの特長は、Ⅰの本課に入る前に設定した最も基本的な事項の確認です。品詞の名称の説明、自動詞・他動詞の違い、名詞句・形容詞句などの説明などこれまで看過されてきた基本事項を確認できるような認知的な指導を試みています。このような扱いは教科書では本邦初ではないかと自負しています。

②〈Grammar〉（各セクション）

丁寧なワンポイントの説明。シロクマやペンギンのキャラクターに吹き出しで語らせている「ひと言説明」にご注目ください。平易な日本語で「簡にして要を得た」説明にしたつもりです。

③〈Exercise〉（各課末）

その課に出ている文法の固めです。最も一般的な出題形式です。

④〈文法のまとめ〉（2課ごと）

2課分の主要な復習で、スパイラル方式で文法項目の固めを行っています。

⑤〈文法項目一覧表〉（巻末付録）

本教科書で扱った文法項目のまとめと発展的な項目を提供しています。

2. 基礎・基本［2］… 言語活動：Reading & Thinking

言語活動は、「5技能（4技能＋Thinking）」のことです。これは教科書編集に当てはめますと、各課の前後にあるその課に関する練習問題や活動、あるいは課と課の間にあるSpeakingやWritingに関する活動になります。

（1）5技能の概観

① Listening

課末の〈Comprehension〉、〈Let's Try〉の〈Starter〉と〈Dialog〉

② Speaking

各セクションの〈Try〉、課末の〈Self Expression〉、〈Let's Try〉の〈Key Expression〉と〈Interaction〉

③ Reading

各セクションの〈Q&A〉と〈Read Again〉、各課第1セクションの〈Reading Skill〉、課末の〈Comprehension〉

④ Writing

課末の〈Self Expression〉、〈Let's Try〉の〈Interaction〉

⑤ Thinking

各課タイトルページの〈Before You Read〉、課末の〈考えてみよう〉、課末の〈Self Expression〉、〈Let's Try〉の〈Interaction〉

（2）Reading & Thinking

MY WAYはこの5技能の、教科書としてのバランスは当然とっていますが、とりわけReadingに重点を置いています。Readingは4技能の根幹に位置し、Thinkingを促進させるからです。Thinkingについては、PISA型読解力を問う問題を取り入れています。

（3）リーディングスキル

リーディングスキルの扱いで、MY WAYの特長は、体系化を図っているだけでなく、網羅化・段階化も取り入れていることです。段階化では、たとえば、Ⅰの第1課と第3課では以下のようなスキルを取り上げました。

- Reading Skill 1［動詞と名詞］
  第2段落7行目を読みながら、動詞を□で囲み、名詞に下線をつけましょう。
  例：Do you say your given name first?
- Reading Skill 3［主語と述部］
  第2段落5行目を読みながら、各文の主語を□で囲み、述部に下線をつけましょう。
  例：Today the number of such buildings is increasing gradually.

特に、Slower learnerへの指導には、このような網羅的および段階的な丁寧さが必要なのです。

3. 応用・発展［1］… リーディングスキル

上記のように、リーディングスキルは、Ⅰ・Ⅱで極めて基本的な活動を取り上げている一方で、Ⅲで、パラグラフリーディング、スキャニング、スキミングなどのリーディングスキルの練磨をある程度の長さの文章を使って応用・発展の活動を取り入れています。ⅢのUnit 1はこの典型です。授業時数に制約がある中で基本を固めたい場合は、このUnit 1のみで十分です。

4. 応用・発展［2］… センター入試方式設問

Ⅲが、ⅠやⅡと大きく異なる点は、Readingの活動の一環として、センター入試で使われている英文の4肢選択問題を取り入れているということです。Unit 1では、平均130語で書かれている英文を読んで3肢選択の問題を2つ出しています。これが、Unit 2になると、平均330語の英文を読んで4肢選択の問題を4つ、さらに、Unit 3では、平均600語の英文を読んで4肢選択の問題を4つ出しています。授業時数に余裕がある場合は、Unit 2およびUnit 3までやって、センター入試の実践に備えてください。

5. 応用・発展［3］… Thinkingと自己表現

ⅢのUnit 2および3では、ⅠやⅡの〈Comprehension〉〈考えてみよう〉〈Self Expression〉を受

けて、さらに応用・発展させた活動である〈Summary〉〈Thinking〉〈Your Opinion〉を設けて、基礎→応用、基本→発展の移行を図っています。

たとえば、〈Summary〉にはその課の文章のタイトルやテーマを入試センター試験の選択肢方式で選ぶ問題にしています。〈Thinking〉ではⅠやⅡのPISA型の読解力の問題をさらに進めたものにしてあります。〈Your Opinion〉もⅠ・Ⅱの〈Self Expression〉よりも自由度を高くして、モデルの英文もやや長い例にしてあります。

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲに通底する豊富な題材内容

教科書の核になるのは本文の題材内容です。題材内容に高校生に訴えるメッセージ性がない教科書は、「魂」がないのも同然です。この理念のもとに、MY WAYシリーズでは本課本文の題材に力を注いできました。すでにⅠとⅡの完成のときに題材の概要については紹介しましたが、改めて、Ⅰ・Ⅱ、そして、Ⅲの題材をまとめて概観します。その際に、各課の題材については、多少とも説明調にしながら、分量は本稿の1行で収まるような簡潔さで、記述することにします。また、各課に付いているOptional Reading（以下、OP）の題材を中黒（･）で示します。OPは、いわば生徒の進度や状況に応じて自由に扱うという位置づけの教材で、分量を1ページに押さえてあります。

1. Ⅰの題材内容

L1. 人の姓名のいろいろ：共通点と類似点
・韓国、中国、フィンランド、日本の姓の由来
L2. 日本とケニヤを結ぶ高橋尚子さんの活動
・日本の日常生活とアフリカとの密接な関係
L3. 都市生活を快適にし、エコに優しい緑の屋根
・環境に負担をかけない都市：マスダール市
L4. エリオット・アーウィットのユニークな写真
・日本にもいるユニークな写真家、梅佳代さん
L5. 世界のさまざまな文字のでき方・由来
・国重友美さんの「英習字」の芸術性
L6. ジグソーの破片で絵を認識するハトの能力
・生き残るために性格を変えるニジマス
L7. オバマ大統領：人々の心を動かすことばの力
・オードリー・ヘップバーンが残したことば
L8. 古代ギリシャの船から見つかった謎の物体
・コロンビアの遺跡で発掘された物体の正体
L9. 世界中の子どもが見ているセサミストリート
・世界でこんな風に呼ばれている「ドラえもん」
L10. ノーベル賞の益川敏英氏の「のりしろ」人生
・宇宙飛行士、山崎直子さんを支えた人生訓

2. Ⅱの題材内容

L1. 世界のピクトグラム（絵文字）のいろいろ
・英国の紋章と日本の家紋の比較
L2. 1月1日でないアジアのさまざまなお正月
・5月1日のメーデー（働く者の祭典）の由来
L3. 意外にできそう：地球にやさしい発明品
・手軽に使える太陽光を利用した調理器具
L4. ブラジル：距離は遠いが心は近い
・地域や団体のチームで競うリオのカーニバル
L5. 目で伝えるコミュニケーション：スポーツ編
・目隠しでおこなうブラインドサッカー
L6. エレベーターで宇宙まで行ける可能性
・探索衛星「はやぶさ」が成功した理由
L7. ZARD：歌がくれた勇気と希望そして絆
・マイケル・ジャクソンの*Heal the World*
L8. 言語接触：ことばの出遭いは文化の出遭い
・ハワイのピジンイングリッシュの例
L9. チャップリンの喜劇の裏に青春時代の苦悩
・映画『独裁者』の最終場面の名演説
L10. 日本建築の不思議：地震でも倒れない五重塔
・4,000年以上の歴史に耐えているピラミッド

以上がⅠとⅡの本課とOPですが、これに、Reading（物語・短編小説の読み物、以下R）として、以下の順でⅠに1つ、Ⅱに2つが加わります。

Ⅰ－R　不穏な動きの二人の男が女性銀行員を…
Ⅱ－R1　飼い猫が宇宙人と会話した驚くべき内容
Ⅱ－R2　1通の手紙から生じた恋人たちの運命

3. Ⅲの題材内容

Ⅲは大別して3つのUnitごとになります。Unit 1では、リーディングスキル（以下、RS1,RS2,RS3,…）の区分けで11領域18種類の題材を取り上げています。領域と種類の数が11と18というように合っていないのは、RS5以降では［Get］と［Try］の2つに分けてそれぞれ別の題材にしているからです。

リーディングスキルについては、すでにⅠとⅡで導入しているのですが、このⅢはそのうちの主なものをスパイラル方式で確認する位置づけです。その際、まず、［Get］で本文を使いながらリーディングスキルを確認します。そして、［Try］でこれを練習するという二段方式になっています。この二段方式をRSの途中のRS5から取り上げているので、11領域18種類の題材となります。

[Unit 1]
RS1. 日英語の擬態語・擬声語の違いに驚く
RS2. ブータンの「国民総幸福度」を考える
RS3. 9月21日の世界平和デーの由来
RS4. アラビア書道と日本の書道との違い
RS5. 薬をあてにしない「笑い治療師」のモットー
ジャンケンに勝つ方法は人間の心理の研究
RS6. 東京のど真ん中にタヌキが住んでいる！
スウェーデンのLanguage Caféの日替わり言語
RS7. 高架鉄道跡に造られた長～い「ハイライン公園」
次々と破られる100メートル徒競走の記録
RS8. 若者達が使っている「メール言語」の英語版
果物や野菜を生産する植物工場の長短
RS9.「隣人の日」が広まれば世界は平和になる
借り自転車を利用すれば一挙両得：北欧編
RS10. 葛飾北斎に倣った「エッフェル塔三十六景」
栽培不可能な「青いバラ」の実現の喜びと不安
RS11.〈広告〉の英語─市のテニスクラブ入会の情報
〈広告〉の英語─「京都一日観光」の料金と見所

Unit 2と3は、通しのLesson番号を使っています。

[Unit 2]
L1. 英国でみかける「細長いボート」の役割
L2. 左手のみのピアニスト：苦悩の末の誕生
L3. 山中教授のiPS（人工多能性幹）細胞のしくみ
L4. 日本人のように風呂好きだった古代ローマ人
L5.「閏年（うるう）」でなく「閏週」がある暦
L6.［ディベート］電子書籍 vs. 紙の本
L7. 世界中こんなに食べられているそば粉
L8. 急減しているスズメやミツバチからの警告

[UNIT 3]
L9. アウンサンスーチー：民主主義と平和のために
L10. 人間の記憶力増強のための5つの方法
L11.［ディベート］選挙権は18歳から与えるべし
L12. 現代社会の諸相にみる「一瞬」の重み
L13. 情報化社会に不可欠なメディア・リテラシー
L14. Englishes：世界で使われているさまざまな英語
Ⅲ－R1　3時限目に教室の窓に出る人の影は…
Ⅲ－R2　2匹のモルモットの荷造り運送の騒動

以上、MY WAY English Communicationシリーズの題材内容をすべて取り上げてみましたが、通覧しますと、以下のような特徴も浮き出てきます。

まず､その数です。ⅠからⅢまでを合わせますと、21＋22＋32で合計75編の題材を揃えたことになります。この数は他社の教科書のいずれと比べても多いと思います。次に、分野やテーマを大別しますと、順不同ですが、ことば、平和、環境、共生、文化（自文化・異文化）、社会（地域・国際）、人生（生き方）、人間（若者・女性）、芸術、健康、科学技術、音楽、スポーツ、娯楽、などさまざまな領域や分野にわたっています。

おわりに

最後に、本文への思いと工夫に関して補足させていただきます。何事も最初と最後が肝心です。本MY WAYシリーズの、あるいは各Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの題材のメッセージが、最初と最後の文に如実に表れていれば、それだけ生徒の心に残ります。以下は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの最初の課の冒頭の文と最後の課の結末の文です。

Ⅰ：Everyone has a name. ...... A *norishiro* (＝freedom of mind) life is fun!
Ⅱ：We have a lot of ways to communicate. ...... It is the younger generation that can keep the traditions alive.
Ⅲ：Each language has its own onomatopoeia. ...... Be confident in your English and use it to communicate with people in the world.

ご覧のように、本シリーズ全体では、冒頭の名前論で生徒の個性やアイデンティティーを喚起し、結末で英語に自信をもって世界の人々と交流しようと呼びかけています。これは各Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、さらには各課やセクションの最初と最後の文にも当てはまります。このようなメッセージへの思いと文章作成上の工夫がMY WAYの編集方針の根底にあります。

特 集2　CROWN English Communication Ⅰ･Ⅱ･Ⅲ でつける「英語の基礎力」

読解重視型 vs. コミュニケーション志向の英語教育を考える

慶應義塾大学　霜崎 實

はじめに

高校での英語授業を「英語で行うことを基本とする」と規定した新学習指導要領が施行されて今年で2年目に入る。この規定については、施行以前から現場の教師の間で期待と不安があったようである。一方では、文法と読解重視の授業から、コミュニケーション志向の授業に舵を切り替えることで、求める英語教育の姿に近づけることができるかもしれない、という期待があった。とりわけ海外留学経験を有する教師や、帰国子女として幼少期から英語に親しんできた教師が、こうした期待を抱くことは自然な成り行きであろう。

しかし、他方では、そこはかとない不安が現場に広がっているという声も聞こえてくる。長年培ってきた読解重視の方法論を放棄して、英語での授業運営に切り替えることからくる不安もあるだろう。また、コミュニケーション志向の英語教育に転換しようとしても、大学入試英語が抜本的に変わらない限り、読解力重視の受験対策を放棄するわけにはいかない、という現実もある。

こうした二つの英語教育へのアプローチをめぐって、英語教育の現場は深刻なジレンマに陥っているのではないか。本稿では、問題の原点に立ち返って、このジレンマを解消する糸口を探ってみたい。

なぜコミュニケーション志向の英語教育か？

最初に、コミュニケーション志向の英語教育と読解重視の英語教育が二者択一の関係にあるのか、という問題について考えたい。もしそうであるならば、高校の英語教育は解決不能な問題を抱えていることになる。特に進学校が読解力養成に重きをおいた受験指導を放棄すれば、塾や予備校に教育の中心がシフトし、高校の教室は二次的な教育の場となってしまうだろう。つまり、高校にとって受験対応型の英語教育を放棄することは現実的な選択ではないことになる。

それでは受験対応型の英語教育が必要とされているにもかかわらず、方向転換が求められているのはなぜか。一つには、巷間言われるように、中学高校で6年間も英語を学んだにもかかわらず、「使える英語」を身につけることができなかった、という意見がある。これを裏付けるように、日本人の英語力が国際水準よりもはるかに低いという客観的なデータも存在する。2010年のTOEFL（iBT）スコアの国際比較によれば、日本は163か国中135位、アジアの中では30か国中27位と低位置に甘んじている。また、海外の大学･大学院に留学しようという志をもった若者が、年々減少傾向にあるという。こうした現状に鑑みると、英語教育の方向転換が急務であると考えるのも当然かもしれない。さらに、グローバル化に伴い、世界共通語としての英語の重要性が増している現在にあってはなおさらのことである。このあたりの事情については、文部科学省が公にしている「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」（2003）や、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」（2013）からも伺える。

しかし、ここでいったん立ち止まって考える必要がある。コミュニケーション志向の英語教育が導入されたからには、従来の読解重視型の英語教育は全面的に切り捨てられるべきものだろうか。

個人的な体験から

ここで、筆者の受けてきた英語教育について述べることをお許し願いたい。あくまでも個人的な経験であり、一般化できるものではないが、それでも問題を考えるヒントにはなると思う。

高校時代に筆者が受けてきた英語教育は、「文法訳読式」の教育であった。1960年代の後半のことだから、ALTの授業もなければ、インターネットもない。英語母語話者の声を聞く機会といえば、録音テープに限定されていた。にもかかわらず、「使えない英語」を学んでいると感じなかったのはなぜか。理由は簡単である。

高校時代の教科書は『The Crown English Readers』であった。かなり高度な内容で、中学時代の教科書と比べ、格段に難しかったと記憶している。しかし、辞書を引きつつ単語帳を作り、個人的に入手した英文法書を読んで基礎的な知識をつけ、副読本を自分で購入しては読んでいた。『The Autobiography of Benjamin Franklin』『A Christmas Carol』『The Fairy Tales of Hans Christian Andersen』をはじめ、親日家として知られていた英国の詩人James Kirkupの一連の日本文化論を読んだのもこの頃である。やがて英語の文章を訳読することなく自然に理解できるようになっているのに気づく瞬間があった。次の段階としては、洋書を買って読むことになるのだが、これは予備校時代のことである。通学電車の中で片道10～20頁ほどのペースで読んでいたが、こうなると辞書なしの飛ばし読みで、日本語を読む感覚とかなり近いものになっていた。

その当時の筆者の英語力は、それなりの語彙力とある程度の文法知識、そして英文を比較的スムーズに読み進める程度のものだったと思う。話すことに関しては、誰に教わるともなく教科書の音読を日常的に行っていたが、英会話をするような環境は整っていなかった。ようやく英会話らしきものを経験し、英語の講義を普通に聴き取ることができるようになったのは、大学入学後のことである。また、日常的に英語で意思疎通することにほとんど不自由を感じなくなったのは、大学時代に経験した2年間のアメリカ留学生活においてであった。

振り返ってみるに、高校時代の文法訳読式授業は、筆者の英語力の基礎を作ってくれたのではないかと思っている。文法訳読式授業といえども、読解のためには十分に「使える英語」を学ぶことができたばかりでなく、そこで培った基礎力が後のコミュニケーション能力習得に通じていたのである。このように考えると、読解重視の英語教育を軽視する方向に動くとすれば、それは、諺にあるように、“Throw the baby out with the bath water”ということになってしまうのではないだろうか。

いわゆる「使える英語」とは？

それでは、世間で言うところの「使える英語」とはどのようなものか。いわゆる実用的な英語のことを指しているのだろうか。ESP（English for Specific Purposes）といった特定目的のために特化したものを念頭においているのかもしれない。例えば、旅行英語のように。目的地の入国審査や税関を通過するとき、空港からホテルに向かうタクシーを利用するとき、ホテルでチェックインするときなど、具体的な場面で役立つ英語という意味で「使える英語」なのかもしれない。しかし、この種の実用英語に特化することは、高校英語教育から重要な要素を失わせる結果になりかねない。

さらに言えば、会話文の丸暗記に留まる限り、本当の英語の基礎力が身に付いたとは言えない。山田雄一郎氏が『日本の英語教育』（岩波新書, 2005, pp.124-30）で指摘するように、「読む」「書く」「聞く」「話す」といった観察可能な言語活動の背後には、それを支えている大きな基底能力があるという。言語能力は水に浮かんだ氷塊のようなもので、水面上に現れている部分はわずかで、水面下に大きな塊が隠れているという。英語の基礎力をつけるためには、実は、水面下に隠れている豊かな言語能力を身につける必要がある、という指摘である。例えば、語彙に関して言えば、1,000語を自由に使いこなすためには、少なくともその数倍の語彙力をもっていなければならないことになる。実用英語に特化することは、必ずしも豊かな言語能力の習得を保証するものではない。言語学者ノーム・チョムスキーのことばを借りれば、言語能力（competence）の本質は、有限の規則に基づき、無限の文を生成する能力にある。特定の場面に限定された表現を暗唱し、決まり文句を発することができるとしても、それだけでは言語能力を獲得したことにはならないのである。

高校英語教育に求められるもの

現在では、筆者の高校時代とは比較にならないほど環境が整っているとはいえ、英語の授業時間が相変わらず不足している現状を考慮すると、高校の英語教育だけで4技能すべてにおいて、バランスのと

れた言語能力を身につけさせるのは、理想とすべき目標にとどまる（もちろん、一部の高校でそのような実績を上げていることを否定するものではない）。魅力的だが実現困難な理想像を描くよりも、実現可能な方法論を模索する方が賢明である。そのためには、「読む」ことを４技能の中心に位置づけたうえで、他の３技能（「書く」「聞く」「話す」）と有機的に関連づける具体的な方法論を創意工夫する道を探ることが現実的な選択となる。

教科書編纂にあっては、適切な題材の選択のもとにコミュニケーション志向の活動を組み込んでいくのが望ましい。英語教育において、語彙や文法の習得が重要であることは言うまでもないが、それだけでは十分ではない。題材内容によって、生徒の知的好奇心を満たしたり、これまでに接したことのないような世界に案内したり、ものを考える新たな視点を提供したりすることも、きわめて重要である。英文を読むことで、環境、歴史、生き方、社会問題などさまざまなテーマについて深く考えることを通じて、新たな世界観を形成することも、英語教育に求められる重要な役割だと言える。

コミュニケーション志向といっても、「伝えるべき内容」を持たない人材を生み出すことが、英語教育の目標ではない。「伝えるべき内容」を持ち、自らの視点で考えていること、感じていることを他者に発信することができる人材こそ、グローバル人材と呼ぶに相応しい。旅行で使える定型表現を暗唱することを一概に否定するわけではないが、それで直ちに「使える英語」が身についたとするのは、言語の本質をわきまえない妄言である。

蛇足ながら付け加えれば、筆者は先に個人的体験に基づいて、読解力重視の英語教育の存在価値について論じたが、このことは従来の文法訳読式授業をそのまま全面的に支持するということではない。文の構造を説明し日本語に訳して終わり、という授業ならば、本当の意味での読解力の養成にはつながらない。自らの視点でテクストを解釈し、批判的に読むことが重要である。つまり、「思考力を促す英語教育」といった観点から、生徒をテクストと向き合わせる必要がある。

『CROWN』シリーズで〈Optional Reading〉を設け、本課の内容に関連した読み物を提示しているのは、自由な発想を促すためでもある。また、〈Food for Thought〉は批判的な思考力を促すことを目論んだものであり、『Ⅲ』の〈Activities〉において、本課の内容についてモデルとなる意見を提示したうえで、自分の意見を英語でまとめる課題を出しているのも、同様の趣旨からである。つたない英語でもよい、「伝えるべき内容」を英語で発信してはじめて、真の意味でのコミュニケーション志向の英語教育が実現したと言えるだろう。

最後になるが、英語の基礎力を養うためには、「音読」が大切であることを強調しておきたい。同時通訳の草分け的存在である國弘正雄氏は、「只管（しかん）朗読」ということばを造語し、ただひたすらに音読することの大切さを強調しているが、音読を通じて英語の発音やリズムを体感するとともに、英語の思考回路を自分のなかに取り込むことができるのである。音読によって英語の意味世界が自分のなかで立ち上がってくるようになれば、コミュニケーション能力の基礎作りに向けた確実な一歩となる。

音読はすぐに目立った変化をもたらさないかもしれないが、確かに有効な活動である。野菜作りをする際に、まず畑の土壌作りが大切だと言われる。これを怠ると、野菜はひ弱で、本来の味を欠いたものになるらしい。土壌作りは手間暇のかかる作業だが、これがあって初めて豊かな収穫をもたらすことが期待できるのである。音読はすぐに結果をもたらすことはないかもしれないが、確かなコミュニケーション能力の基礎作りにつながるのである。

おわりに

本稿では、読解重視の英語教育とコミュニケーション志向の英語教育という二つのアプローチをめぐって、両者が二律背反の関係にあるものではないことを論じた。高校英語教育にとっては、「読む」ことを重視しつつも、他の技能と有機的に関連付けることは十分に可能であるばかりでなく、基礎力を養う意味においても重要である。二つのアプローチをいかに統合していくのかという問題は、現場の教師の熱意と創意工夫にかかっている。その意味で、今ほど英語教育がやりがいのある時代はないのかもしれない。『CROWN』シリーズがそのような目標に向かって、英語教師の皆様の力強い味方となることを願う次第である。

特集２　MY WAY English Communication Ⅰ･Ⅱ･Ⅲでつける「英語の基礎力」

伝わる英語を発信するための文法力

法政大学　飯野　厚

英語の基礎力とは

教育現場から「コミュニケーション以前に基礎力が足りない」、「生徒に基礎力を付ける必要がある」といった声をよく耳にします。さて、英語の基礎力とはどのような力なのでしょうか。いろいろな定義があると思いますが、私は「音声・単語・文法の３領域における知識を、聞く・読む・書く・話すという４技能で運用できる力」と定義できるのではないかと思います。

この定義に照らしてみると、MY WAY English Communicationシリーズは基礎力をまんべんなく網羅して学習できるようにしています。ただし、現在の高校現場の現実とニーズを加味し、語彙、文法、リーディングに重みを付けて編集しています。それは、『MY WAY English Communication Ⅰ･Ⅱ･Ⅲ』（以下、『MY WAY Ⅰ･Ⅱ･Ⅲ』）の最終的な到達目標を、センター入試レベルの英文が一定の理解度と速度で読めるようになること、しているからです。語彙については、シリーズ全体で中学校既習扱いの語も含めて3,000語を網羅できるようにしています。

そこで、本稿では、MY WAY English Communicationシリーズが最も重視している基礎力として「文法」の扱いに焦点をあてます。

1. 学習指導要領における文法の扱い

現行学習指導要領では、指導すべき文法項目が以下の８つに大綱化されました。具体的には、「不定詞」「関係代名詞」「関係副詞」「助動詞」「it が名詞用法の句・節を指すもの」「動詞の時制」「仮定法」「分詞構文」です。文型については、「文構造のうち、運用度の高いもの」という文言のみとなっています。そしてまたこれらの文法事項は、「コミュニケーション英語Ⅰ」において，言語活動と効果的に関連付けてすべて指導すること、とされています。この点については、先述の基礎力の定義にかなった内容と言えます。文法の知識を有するだけでなく、それを４技能に応用できるように指導することが求められています。

2. 品詞の認識―中高の橋渡しとして

高校生が文法の学習においてつまずくポイントとして、品詞の認識が挙げられます。中学校では、専門的な文法用語をあまり使わないで指導する傾向がある一方、高校では文構造の説明には品詞名を使うことが一般的です。高校１年生でのつまずきを防ぐために、『MY WAY Ⅰ』の巻頭にStarterとして以下のような内容を置きました。①「文を作る品詞のいろいろ」（単語例と品詞名の意味的定義）、②「文の中心となる動詞」（自動詞と他動詞の区別）、③「語の順序と文型」、④「文の中のまとまり－句と節」です。可能な限り長い説明は避け、語句や文の例を多用して表などでビジュアルに提示しています。

なお、ここは本レッスンではありませんので、まずは①の品詞について触れる程度で扱ってもらえると良いと考えています。②以降は、本課の指導を進めながら、適宜参照するような使い方をお勧めします。

3. スパイラル式に文法知識の深化を図る

文法学習の理想は、英語をコミュニケーションの場面で使いながら習得することです。しかし、学校の１科目として英語を学ぶ日本人学習者にとって、口頭によるコミュニケーションのために英語を使うチャンスはきわめて少ないのが現実です。従って、「使いながら学ぶ」という際の「使う」場面はリーディングによってメッセージを受け取るコミュニケーションが主となります。

『MY WAY』では文法事項をスパイラル式で理解して深化させられるように、文法の配列を組み立てました。具体的には中学校の文法事項の復習、『Ⅰ』、『Ⅱ』と3段階で、文型および8つの文法項目を扱っています（表参照）。

課	MY WAY Ⅰ	課	MY WAY Ⅱ
1	SV / SVO / SVC / SVO_1O_2	1	SVC, SVO / SVO（O=if節）/ SVC（C=過去分詞）
2	SVOC / SVO（O=that節）/ 比較級・最上級	2	SVO_1O_2（O_2=if節、that節、what節）/ it seems that ～
3	現在進行形 / 現在完了形 / 過去完了形	3	It is ... to不定詞 / It is ... that ～ / 形式目的語
4	助動詞 / 受け身 / 助動詞のついた受け身	4	SVOC(C=動詞の原形、過去分詞）/ SVO＋（to）不定詞
5	動名詞 / to不定詞 / It is～to不定詞	5	関係代名詞 / 前置詞＋関係代名詞 / 関係代名詞・関係副詞の非制限用法
6	関係代名詞 / SVO_1O_2（O_2=how to ～）	6	現在完了形 / 現在完了進行形 / 過去完了進行形 / 未来進行形
7	現在分詞の形容詞的用法 / 過去分詞の形容詞的用法 / 分詞構文	7	助動詞 / 助動詞＋have＋過去分詞 / wouldを使った表現 / 完了不定詞
8	関係副詞 / It is ... that ～	8	仮定法過去 / 仮定法過去完了 / ifを使わない仮定法 / no matter＋疑問詞
9	if節 / 仮定法過去 / I wish ～ / as if ～	9	分詞構文（現在分詞、過去分詞）/ 完了形の分詞構文 / 付帯状況のwith
10	SVO＋to不定詞 / SVOC（C=動詞の原形、現在分詞）/ SVO_1O_2（O_2=if / whether節）	10	同格のthat / 倒置 / 省略 / 強調構文

表の『MY WAY Ⅰ』では1レッスンの中で、最初のセクションで中学校レベルの文法（表中の下線部）を扱い、後で高校レベルの文法事項を導入します。

例えば、表の『MY WAY Ⅰ』のLesson 4では、高校レベルの「助動詞のついた受け身」を導入する前に、1セクション目で「助動詞」、2セクション目で「受け身」を扱っています。このように、1つのレッスンで、関連した文法事項を復習しながら新たな文法事項を導入するようにしています。さらに、『MY WAY Ⅱ』の7課では〈助動詞＋have＋過去分詞〉、〈wouldを使った表現〉と、発展的に積み上げます。

『MY WAY Ⅰ』と『Ⅱ』の文法事項の配列については、題材の中身やテーマによって、最も適した文法事項の組み合わせを調整しました。例えば、仮定法過去完了を含めるには、『Ⅱ』の題材Lesson 9 Charles Chaplinのように、過去のことを中心に語る題材が適しています。また、完了進行形や未来進行形などさまざま時間の切り取り方を示すためには、Lesson 6 Space Elevator（宇宙エレベーター）のような開発の経緯と未来への夢がある科学ものが適しています。

このように、『MY WAY』は高校生の琴線に触れる題材を配置しながら、文法の習得を促します。

4. 発信のための簡潔でビジュアルな文法説明

各セクションにはGrammarのコーナーがあります。これはリーディングによるメッセージの理解を経た段階で文法的に振り返るというFocus on Formの手法に即しています。

簡潔な文法説明として、日本語で「○○という言い方」＝ 英語で「△□という形」という数式的な提示方法を採っています。現在進行形ならば「～している・～しつつある」＝［be動詞＋～ ing］という具合です（Ⅰ, Lesson 3）。ここでは、日本語によるメッセージがあることを大切にして、そのメッセージを正確に伝えるために文法（form）があることを強調しています。

ビジュアルな説明方法として、本文からの文例に色の網掛けを施して、主語や述語動詞などを示すようにしています。また、完了形など、図解を用いた説明が有効な文法項目は絵を使って概念的なイメージを伝えるようにしました。そのほかに、傍線などで文中の語句の関係を結びつけるなど、先生方が授業において板書するような情報も含めています。

発信のための文法として、ターゲット文の後の追加的な文法説明において、「使う」「表す」ということばを多く使っています。例えば、文型SVOの説明では、「目的語には名詞を使います。」という説明です。旧来の「目的語になれるのは名詞です」といった現象の説明調とは異なります。英語を解釈するためだけに文法知識を得るのではなく、学んでいる学習者がその文法事項を使ってメッセージを伝えることを想定しています。

この他に、シロクマのキャラクターによる発言があります。ここでは、生徒にとって文法理解のヒントとなるような情報や、先生方が授業でひとこと気づきを与えるときのワンポイントを示しています。生徒が文法事項のつながりに気づいたり、発展的にとらえるためのヒントになればと願っています。

5. 対話体による文法演習

文法事項の説明につづく演習問題（TRY!）は基本的に対話体になっています。文法学習はとかく文語体が中心となりがちですが、口語体による対人的な文脈での扱いになっています。最小対の対話ですが、生徒が学んだ文法事項が話し言葉として実際に使われるという可能性に気づいてもらえるとよいと考えています。問題自体は、平易な選択式や語順整序なので、問題を解いた後に生徒同志ペアで、英語を声に出しながら答え合わせをしたり、定着のために、音読に利用したりすることをお勧めします。

なお、各レッスンの第1セクションだけは、Reading Skillコーナーでスペースが不足しているために1文単位となっています。

6. 総合演習としての課末Exercises

セクション単位の1つの文法項目に関するドリルとは異なり、課末のExercisesでは、各セクションで学んだ文法項目を混合した条件で問題を作っています。例えば『Ⅱ』のLesson 3では、第1セクションで〈It is ... to ～〉の構文と〈It is ... that ～〉構文、第2セクションでは〈S＋V＋it...to ～〉の形式目的語itの構文、第3セクションでは〈S＋V＋it...that ～〉の構文を扱っています。大問1は、この4つのタイプの文を混在させて各文の空欄にtoかthatのどちらかを入れる問題です。3つのセクションで学んだ様々な文構造の中から〈it...to ～〉、〈it...that ～〉の使い方を発見するドリルです。

7. 1文レベルの自己表現

Exercisesの中に、ほんの一行だけの自己表現を問うOne Moreがあります。大問1あるいは大問2の最後で、習熟した文法項目を使って小さな自己表現を促すものです。例として、『Ⅱ』の以下のレッスンでの文を示します。

課末のOne More の例

L7　助動詞　（昨日すべきだったことは？）

I should have ______________ yesterday.

L8　仮定法　（～がなければどうする？）

Without ____________ , I would ____________.

L9　分詞構文　（いちばん好きな料理は？）

Speaking of food, I like ________________ best.

このような一文レベルの自己表現を発展させた活動が、後に続くSelf-Expressionです。こちらは、その課で学んだ文法事項も含めて、内容重視で話す力に結びつけるための活動となります。

8. 語彙文法的アプローチによる文法の整理

2レッスンが終わるごとに1ページを割いて、「文法のまとめ」というコーナーを設けています。このコーナーは、以下の表のような構成です。

MY WAY Ⅰ		MY WAY Ⅱ	
①英語と日本語の語順	日英による5文型	①いろいろな文型	動詞型からみる5文型
②過去分詞のいろいろ	完了相、受け身、形容詞	②itのいろいろ	指示する内容、時間・天候、形式主語
③toのいろいろ	前置詞、不定詞	③時を表す表現のいろいろ	現在・過去・進行・完了・完了進行
④～ingのいろいろ	進行相、動名詞、形容詞、分詞構文	④wh-語などのいろいろ	疑問詞、関係代名詞、関係副詞
⑤ifのいろいろ	条件、間接疑問、仮定法	⑤thatのいろいろ	指示代名詞、関係代名詞、接続詞、同格

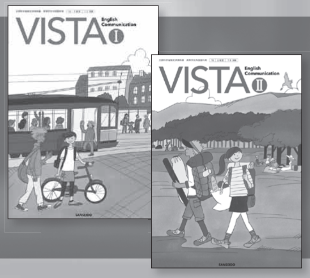
ご覧のように「○○のいろいろ」というタイトルを多く使っています。この「いろいろ」のもとは、同じ語（あるいは文法形態素）でありながら、多様な用法があることです。例えばthatは「あれ、それ」という指示代名詞、関係代名詞、SVO（that節）のthatのような接続詞、名詞の内容を説明する同格など、さまざまな用法があります。このように一つの語が様々な文法的機能を持つことは母語話者にとっては経済的なのですが、学習者にとっては文法学習が複雑になる原因です。ある程度、文法事項の理解が蓄積した段階で、一度頭の中で整理しなおすためのコーナーです。

おわりに

以上、MY WAY English Communicationシリーズにおける文法の扱いを紹介しました。細かな点も紹介しましたが、その裏には著者人の議論と思い入れがあります。生徒の中に、理解のためだけの文法ではなく、発信のための基礎力として文法が身についてくれることを願っています。

特 集2　VISTA English Communication Ⅰ・Ⅱでつける「英語の基礎力」

基礎力の定着を目指して



昭和女子大学　金 子 朝 子

どの言語を学ぶにも、その基礎は語彙力と文法力にある。例えば、waterという語を知っていれば、コップを持って何か探している人に “Water?(↗)” と水が欲しいのかを聞いたり、水の入ったボトルを持ってきて “Water.(↘)” と言って水を注いだりなど、何とか意思が伝えられる。しかしこれには限界がある。より詳細な意味を伝えるためには、いくつかの語彙を英語のルールに従って並べる文法力が必要だ。様々な分野で英語力を付けるための指導が研究されている。だが、その成果もそのまま日本の授業に当てはめることは難しい。

実際の高校生の英語語彙力や文法力の現状はどうなのか、そして、それらの力をより確実にするための知識と使用のバランスをどう取れば良いのかを考えてみたい。最後に、より確実な力を付けるために『VISTA』の編集で工夫した点をご紹介したい。

（1）英語の基礎力

コミュニケーションのチャンネルは、声の大きさからジェスチャーに至るまで、いくつもある。しかし、言語そのものが最も中心的なコミュニケーションの道具であることに間違いはない。

小学校英語活動、中学校・高等学校学習指導要領（外国語）の目標には、外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することによって、小学校では「コミュニケーションの素地」を、中学校では「コミュニケーションの基礎」を、高等学校では「コミュニケーション能力」を「養う」と記されている。これを基準とすれば、中学校学習指導要領が示している言語材料を身に付けていることが、英語の基礎力と考えられよう。語彙は1,200語が、文法事項は①文の仕組み、②さまざまな文構造、③進行形も含めた動詞の時制、④受け身、⑤to不定詞、動名詞、分詞などの準動詞、⑥代名詞、形容詞･副詞、などが言語材料としてあげられている。

（2）基礎力の現状

生徒の語彙力の現状はどの程度か。表1は、2007年度版の中学校7社、高等学校5社の英語教科書で使用された語彙と、中学3年生を対象に2011年度に実施された全国学力テスト「特定の課題に関する調査（英語：「書くこと」）」の作文解答の一部、大学生のエッセイを集めた「ICLE日本人サブコーパス」の語彙使用の特徴を比較したものである。

語彙の標準タイプトークン比（総語数に対する異なり語数の標準化された比率。語彙の豊かさの指標）と一文の平均語数の推移を見ると、いずれも高学年になるに従って伸びている。一方、中学3年生の作文と大学生の作文では、教科書のペースに追いついているとは言えない。調査やICLEは産出語彙数を示している上にトピックが指定されていたため、語彙の豊かさの点ではかなりハンディがあるが、この点を考慮しても大学生でやっと中学2年の教科書に届く程度である。理解はできても使用できるまでには定着していないことを表している。

表1. 学習語彙と使用語彙の比較

	教科書					調査	
	中学1年	中学2年	中学3年	高校Ⅰ	高校Ⅱ	調査(中3)	ICLE(大学生)
標準タイプトークン比	31.49	37.26	39.70	40.29	40.63	26.37	35.30
一文の平均語数	4.01	6.00	7.57	12.48	13.91	6.02	12.77

それでは高校生の文法力はどうだろう。大学生のデータから作文の誤りを見ると、表2の通りである。表中の「語彙と文法の関連」の誤りは、It is natural, necessary, surprising等に続くthat節に、話し手の主観的、感情的判断を示すshouldを使用していない等がその例で、このカテゴリーを除いても文法の誤りがすべての誤りの半分近くを占めている。しかも動詞は時制、名詞は数の誤りが中心で、文法ルール自体はほとんどが中学校で学んだはずの事項であった。学んだ時点で理解されていたとすれば、これも定着していない証拠となる。

表2. ICLE日本人サブコーパスに見られる誤り

分類		割合	分類		割合
語彙 24.43%	綴り	6.25%	文法 48.89%	冠詞	15.48%
	語彙の選択	16.25%		名詞	8.39%
	品詞	1.93%		代名詞	5.10%
使用域		0.78%		形容詞	0.40%
表現		10.39%		副詞	0.73%
語彙と文法の関連		8.17%		動詞	10.50%
句読点		7.32%		語順（含脱落、余剰）	8.29%

（3）砂上の楼閣にならないために

もともと言語の習得には、気が遠くなるほどの時間が必要だ。教室外で、学習している言語に日常的に触れることができる環境にいても、どの言語であっても、初級を抜け出す（日本の中学終了程度）までに、少なくとも1,000時間以上が必要（Brown & Larson-Hall, 2012）とされる。教室外ではほとんど英語に触れない日本の環境で、中学校では、週4時間×年35週×3年で420時間（実際は50分授業なので350時間）の授業しかない。そのハンディの中で、語彙や文法の定着を図ることが求められている。英語の学習では、例えば、3人称単数の主語の場合には動詞に-sを付けることを習得しても、助動詞を学ぶと知識の組み換えが必要となる。そこで、たとえ学んだことの80%を身に付ける力を持つ優秀な生徒がいて、1年生で学んだ100の内の80を身に付けても、2年では（80＋100）の80%の144、3年では（144＋100）の80%の195しか定着しない計算になる。基礎の部分で分母を増やすことの重要さが納得できる。しっかりとした土台作りのために、まずは基本の語彙と文法を理解し、次に英語を使って情報、気持、考えなどを伝え合い、的確に伝わらない原因となる誤りを修正することを繰り返して、理解したことを定着させることが何より重要だ。

文法を確実に身に付けるために、高校1年の初めに中学の教科書の2，3年を暗記し、中学の学習を振り返ってはどうだろう。特に、文法能力は段階を追って発達するので、中学までの文法が定着していないと高校での学習が砂上の楼閣になる。文法の誤りのトップである冠詞も自然に身に付く。正確に暗記できたら、書いたり口頭発表をしたりするのも良い。

一方、語彙学習には決まった発達段階はない。例えば、名詞のantよりもhippopotamusの方が、綴りが長くて難しいかというとそうでもない。興味や必要性があれば、hippopotamusを先に学ぶ子供も多い。いずれにせよ、私たち人間は、意味のないものは覚えてもすぐに忘れてしまうものなので、新しい単語を覚えたら、ぜひ、その語彙が使われている英文例も覚えておきたい。私の高校時代の恩師は毎時間、It's good for the health to get up early in the morning.の文を全員が一人一人正確に言えてから授業を始めた。この1文を正確に暗記したことで、ここで用いられている語彙や文法は絶対に忘れない。名詞に比べると、動詞は文中の他の要因によって使用する語彙やその形が決まることを考えると、なおさら、中学の教科書の利用はお薦めである。

コンピュータもそうであるように、頭の中にデータがほとんどない状態では、英語を理解したり使ったりすることは絶対にできない。その上残念なことに、人間はコンピュータと違い、一度覚えてもそのままでは必ずいつかは忘れる。全く忘れてしまってからまたゼロからスタートするよりは、忘れてしまう前に思い出す工夫、つまり繰り返しが大切だ。

（4）宣言的知識と手続き的知識

英語を習得するには、英語の仕組みについての知識である「宣言的知識」とそれを使って実際にどうコミュニケーションを行うかについての知識である「手続き的知識」の2つが必要だと考えられている。一般的には前者を「知識」、後者を「使用」と呼ぶが、どのように使用するかも知識の一つという考え方で

表3. 指導のプロセス

中学校			高等学校		
1年	2年	3年	1年	2年	3年
A 宣言的知識／手続き的知識			D 宣言的知識／手続き的知識		
B 宣言的知識／手続き的知識			E 宣言的知識／手続き的知識		
C 宣言的知識／手続き的知識			F 宣言的知識／手続き的知識		

ある。一方だけでは習得には不十分だ。英語を外国語として学習する日本にいて、短期間に目標の英語力に達するためには、宣言的知識は重要だ。宣言的知識は単に教師が文法説明をすることばかりではなく、その知識に基づいて英語を使用した時の誤りを、教師や他の生徒から修正してもらうことでも身に付く。こうした修正は、生徒に文法的な気づきをもたらす絶好の機会となっている。

さて、木箱を作ろうとしても、板の大きさが不揃いでカナヅチも柄が抜けそうなものしかないと、釘を打つことすらできないように、中学までの基礎的な英語力がなければ、宣言的知識の積み上げも手続き的知識の積み上げもできない。となると、中学校でどの程度の語彙力と文法力が身についているかで、高校での指導プロセスを変えざるを得ない。現時点では、小学校では英語に「慣れ親しむ」枠組みとなっており、それに続く中・高が英語指導の重点をどこに置くかを考えることになる。表3には、中学校、高等学校で宣言的知識と手続き的知識のバランスをどう取るかについて、いくつかのプロセスの可能性を示した。どのプロセスをとっても、中学3年終了時には両方の知識を等分に備えていることを前提にしてある。B＋Eが理想的にも思えるが、両方を常に並行して行うことはどちらも不十分なままになりそうだ。小学校英語の今後の動向によってはA＋Dも可能となるかもしれないが、現状では難しい。基礎力を十分付けようとすればCで始め、大学入試を目指さない場合は、Fを取ることも可能だ。トータルに見て、宣言的知識だけでも、手続き的知識だけでも、コミュニケーション能力を身に付けることは難しい。もし、その2つの知識の基礎となる文法力の定着が不十分ならば、高校でもより多くの時間を宣言的知識の補充にかけなければならない。宣言的知識と手続き的知識の配分は、それぞれの高校の英語学習と指導に関する様々な条件を考慮して決めて行かざるを得ないだろう。

（5）『VISTA English Communication Ⅰ・Ⅱ』の工夫

従来から『VISTA』は「言葉の教育」「国際理解教育」「人間教育」という大きな柱に加えて、基礎力の定着を念頭に編集している。これは、将来、社会に出て、そこで必要となる英語力を積み重ねるための土台となる力である。

『VISTA Ⅰ』ではLesson 1～3で中学校の総合的な復習を行っている。中学2，3年の教科書の代わりに、この3課を暗記用に利用していただくこともできる。『VISTA Ⅰ・Ⅱ』を通して、本文はできるだけ使用頻度の高い基礎的な語彙を用いてシンプルな英文で易しくまとめ、練習問題は、既習内容を違ったシチュエーションで繰り返せるように工夫した。前課で学んだ新出の文法事項を含む文を、次の課の本文に出すことで、すっかり忘れてしまう前にもう一度違った文脈の中で触れることが自然にできるように配慮した。

また、宣言的知識、手続的知識の両方を定着させるために、学んだ語彙や文法事項を様々なコンテクストの中で4技能を統合的に使って行う学習も多く取り入れている。読解力を養うためには、各レッスンのセクションごとにReading Pointを明記し、本文の後のThink!では、英文のサマリーを書く前にその内容を深く理解するため、生徒はまずPISA型の設問に答える。それを基に本文の英文サマリーを完成する構成としている。『VISTA Ⅱ』の巻末の「活用例文集」も、文法を解説したStudy It!の例文の補足として、英文の仕組みを確認するために大いに活用していただけることを期待している。

〈参考文献〉S. Brown & J. Larson-Hall（2012）. *Second Language Acquisition Myth*. University of Michigan.

特集2　CROWN English Expression Ⅰ・Ⅱでつける「英語の基礎力」

理系学生に求められる英語コミュニケーション能力

電気通信大学　松原好次

はじめに

「グローバル人材の育成」が大学に課されている昨今、文系はもちろん理系学部における英語教育も大きな変容を遂げつつあります。論文執筆や研究発表での英語使用が当然視されている土壌で、どのような英語教育が求められ、実際どのようなプログラムが導入されているかという観点から、高校で身につけておくべき「英語の基礎力」とは何かを探ってみることにします。

理系学部の学生に求められる「英語の基礎力」

冒頭で触れた「グローバル人材」とは、必ずしも「外国語（とりわけ英語）のできる人」を意味するわけではないでしょうが、将来、留学したり、就職したりして、母語以外の言語で情報を収集し、考えを相手に伝える必要性が生じたとき、自分の学んだ言語を活用できるようになれば、「グローバル人材」に一歩近づくことができると言えるかもしれません。

そのような人材の育成を目標として、10年ほど前から、理系の学生を対象に、英語のカリキュラムや教授法について大幅な見直しが進められています。一例として、2008年4月から東京大学教養学部で実施されているALESSプログラムを挙げることができます。このプログラム（Active Learning of English for Science Students）は、「全理系学生にとって将来の研究やキャリアに欠かせない“科学者としての英語コミュニケーション能力”を、1学期にわたり“独自の実験テーマ決定→実験→英語の科学論文執筆→英語プレゼンテーション（口頭発表やポスター発表など）”の流れで身につけていく授業」（東京大学教養学部附属教養教育高度化機構発行のパンフレットより抜粋）です。

ALESSプログラムを履修した学生に期待されていることは、（1）科学論文の論理的構造の理解と論文作法の習得、（2）オリジナルな実験に基づく科学論文の執筆、(3) フォーマルな言語と語彙の使用法、(4) 書き上げた論文に基づく5分間のプレゼンテーションです。4つの到達目標を大学1年生の春学期だけでクリアするには、高校の英語学習で「しっかりした基礎力」をつけておかなくてはなりません。その「基礎力」とは、どのような力でしょうか。

まず、しっかりした英文読解力が根底になくてはいけないでしょう。将来、英語の文献（電子ジャーナル・ウェブサイト・書籍・雑誌）に当たって、専門分野の情報を得ることができるようになるためには、高校の英語学習で、しっかりした読解力を身につけておく必要があります。

次に、文章構成力が基礎力の一部として求められるはずです。自らの考えをリサーチペーパーにまとめ上げるには、論文作法習得の前段階として、文単位、パラグラフ単位の作文能力が必要不可欠です。その中には、「話しことば」とは異なる「書きことば」の特徴（フォーマルな語彙・表現）に対する基本的な認識も含まれています。

さらに、「基礎力」のなかには、プレゼンテーションについての基本的な心構えが組み込まれることになります。将来、研究成果をプレゼンテーションという形で伝えるためには、話しことば特有のレトリックを身につけておく必要があります。もちろん、発表の後には質疑応答がありますので、音声面でもしっかりした聴解力をつけておかなくてはいけません。

リサーチペーパー執筆で発揮される「語法・文法の基礎力」

ALESSプログラムの到達目標を参考に、「英語の基礎力」に含まれるべき要素を3点挙げたわけですが、具体的にどのような英語力の獲得が望まれているか

を検討することにします。その際、筆者が理系の学生を対象に行なっているリサーチペーパーの指導で気づいた具体例に触れてみましょう。

（1）情報理工学部1年生の必修科目Academic Written Englishでは、ALESSプログラムと同様に、一人ひとりの学生が独自のテーマで実験したり、インタビューしたりしたのち、リサーチペーパー（A4版4枚程度）を書き、プレゼンテーションで研究発表をします。学生たちは、まずIMRAD（Introduction, Methods, Results and Discussion）方式で書かれた論文を読む過程で、科学論文の論理的構造を把握していきます。同時に、図表の説明、出典表記、引用の仕方、Abstractの書き方などについても学びます。その後、実際にリサーチペーパーの原稿を書く段階では、フォーマルな語彙や表現の使用法にも注意を促されます。すなわち、アングロ・サクソン本来語とラテン借入語の関係を知ったうえで、句動詞（例: go up）から、ラテン借入語（increase）への切り替えを実践します。さらに、インフォーマルな表現（例：won't などの短縮形）を避けたり、主観的な語（例：the best）の代わりに、客観的な語（the most cost-effective）を用いることを学んでいきます。

（2）原稿執筆段階で学生たちは、高校での英語学習における「基礎力」を試されることになります。まず、時制や相に関する「基礎力」について考えてみましょう。リサーチペーパーにおいては、MethodsやResultsのセクションで過去形が多用されるのに対し、IntroductionやDiscussion（Conclusion）では現在形が用いられることなどを実感していきます。たとえば、Our experimental results showed …のなかで使われる過去形（showed）に対し、These findings show that …で用いられる現在形（show）は、発見の正しさや意義を「結論」の部分で強調できることに気づきます。また、日本語の場合、「本論文では…を提案することができた」となるのに対し、英語では「結論」で新手法を提案する際、現在形の使用が普通であることを学びます（例：In this paper we suggest …）。「過去に行なわれた実験等に基づく説でも、一般に受け入れられていて定説になっている場合は現在形」、あるいは、「過去に起きたことがらでも、現在の絡みで述べたいときは現在完了形」などという「時制・相」に関する基本的事項は、高校における「基礎力」が付いている学生にとっては、多くの説明を必要としません。

（3）次に、学生たちは態についての「基礎力」を実践の場で活用することになります。We conducted …やWe observed …という能動態と同時に、Our experiment was conducted to find whether …やNo significant differences were observed between … and …などの受動態が、MethodsやResultsセクションで効果的に使えることを学びます。

（4）断言を避けるための予防措置（hedging）として助動詞を適切に使用できるかどうかというときに、高校で身につけておくべき「基礎力」の有る無しが問われてきます。No relationships were found …と断定できない場合、心態を表す助動詞のcouldを用いるほうが適切であることを学生は確認します。可能性の高低に応じて、would, should, may, might, couldが使い分けられることも、リサーチペーパーを書き上げる過程で学生は学んでいきます。しかし、高校段階の学習で助動詞や仮定法の基礎知識が身についていなければ、学生が苦労するのは必定です。

CROWN English Expression Ⅰ・Ⅱ が目ざす「英語の基礎力」

さて、『クラウン英語表現』には、上記の文法事項を含め、準動詞・関係詞・仮定法など重要項目が、Ⅰの基礎編（16レッスン）、Ⅱの発展編（10レッスン）で網羅的に扱われています。リサーチペーパーを書き上げ、プレゼンによる発表に至る過程で浮上してくる「英語の基礎力」のうち、上記4項目以外の重要な要素のいくつかを紹介しましょう。

（1）学生がリサーチペーパーを書く際、最も悩むのは不定冠詞と定冠詞の使い分けです。たとえば、Based on these findings, we propose a new approach …において、可算名詞（approach）に不定冠詞（a）を付ける理由が学生に理解されていなくてはなりません。AbstractまたはIntroductionで、読者にとって新情報となる「新しいアプローチ」を提案するわけですから、旧情報のマーカーである定冠詞（the）ではインパクトが弱まってしまいます。a new approachだからこそ、読んでみたいという気持ちを喚起できるわけです。『クラウン英語表現Ⅰ』のGrammar Profile解説編では、「日本語と英語の発想の違いに注意しよう」というタイトルのもと、冠詞の使い分けや無冠詞の複数形（例：I like apples.）の使い方、あるいは、可算名詞と不可算名詞の区別などに触れています。

（2）学生にとって、もう一つの悩みの種は、どのようにしたら文と文の間に有機的な「つながり」を付けて、読者にとって分かりやすいテクストを書くことができるかということです。文の結合（sentence binding）に関する知識も「基礎力」の一部になるはずです。ブツ切れの文を有機的につなげるためには、接続詞、同格、セミコロン / コロン、分詞構文の使用などがあることを学んでいれば、文の断片化（sentence fragment）やダラダラ文（run-on sentence）を避けることができます。『クラウン英語表現Ⅱ』のToward Paragraph Writing（パラグラフ・ライティングに向けて）では、文と文だけでなく、パラグラフとパラグラフの間に論理的な「つながり」を付けるために必要となる「つなぎ表現」に焦点を当てています。さらに、パラレル構造（parallel structure / parallelism）を意識して、シフト（shift：文構成上の不一致）を避ける方法も取り上げています。ここに取り上げられている基本知識があれば、リサーチペーパーを書く際、This gas is colorless, insoluble and has no odor. という文より、This gas is colorless, insoluble and odorless. という文のほうが、読者にとってわかりやすいということに気づくはずです。

（3）論文とプレゼンテーションでは、語彙や表現を使い分ける必要があるということも学生たちを悩ませます。前述したとおり、書きことばでは、The new finding will get rid of the old faulty idea. という句動詞の入った表現より、eliminate というラテン語起源の動詞を使った表現のほうが好まれます。しかし、プレゼンテーションの場合には、書きことばとは異なる語彙・表現を用いるほうが効果的になります。たとえば、2人称の入ったYou can see the result in Table 1.のほうが、The result is presented in Table 1.より、オーディエンスの注意を引きつけるはずです。『クラウン英語表現』は、Speakingのレッスン（Ⅰで8箇所、Ⅱで6箇所）を設け、スピーチ、プレゼンテーション、ディスカッション、ディベートに頻出する具体的な表現を扱っています。将来、口頭で研究発表したり、質問に応えたりする際に必要となる心構えと技能を、Speakingの14レッスンで身につけておくことが、「理系学生に求められる英語コミュニケーション能力」の一部であるはずです。

語法・文法・発音の指導を明示的に

以上述べてきたように、『クラウン英語表現』は、明示的な（explicit）語法・文法・発音の指導の大切さを、Ⅰ（基礎編）・Ⅱ（発展編）の両編で前面に打ち出しています。それは、英語という言語が語彙・文法・音声・文字のどれをとっても日本語と異質だという認識から出発しているからです。母語との対比において、英語の語彙・文構造・音韻の特徴を理解したうえ、繰り返し練習して運用できるようになること（言語処理の自動化）が望まれます。限られた授業時間で効率的に、しかも、「しっかりした基礎力」を身につけさせるためには、学習者の母語を問題（problem）として切り捨てるのではなく、資産（resource）として最大限に活用すべきなのです。口語運用力を重視するあまり、上滑りの日常会話に堕してしまうと、冒頭で紹介したALESSプログラムの掲げる到達目標には到底たどり着けないでしょう。

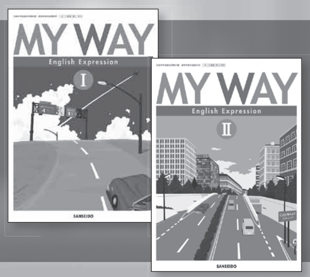
おわりに

「理系学生に求められる英語コミュニケーション能力」という視点から、高校で身につけておくべき「英語の基礎力」を検討してきたわけですが、この「基礎力」というものは「将来伸びていくであろう英語運用力の確かな基盤」と定義できるかもしれません。そして、このコミュニケーション能力は理系の学生に限定されるものではなく、文系の学生にも等しく求められている力であるはずです。ベクトルの構成要素が「大きさ」と「方向」であるとするならば、『CROWN English Expression Ⅰ・Ⅱ』は、「確かな英語の基礎力」という「大きさ」を保証する教科書と言えるでしょう。明示的な説明による理解のうえ、語法・文法・発音の基本を何度も繰り返すことによって身体に覚え込ませることこそ、「英語の基礎力」につながると信じています。将来さまざまな方面に伸びていく生徒に「方向性」を示してくださる現場の先生方にとって、理系学生を対象にした筆者の授業実践が少しでも参考になれば幸いです。

〈参考文献〉東京大学教養学部ALESSプログラム（編）『*Active English for Science*：英語で科学する―レポート、論文、プレゼンテーション』東京大学出版会、2012年

特 集2　MY WAY English Expression Ⅰ・Ⅱでつける「英語の基礎力」

留学英語プログラムから 英語の基礎力を考える



同志社女子大学　飯田　毅

1. はじめに

一昔前の日本の大学の英語教育は、生徒が高校までに養ってきた英語の力を頼りにしているような時代でした。言い換えれば、大学受験前の英語力が最も高く、大学に入学すると、英語力はだんだん下がっていくという時代でした。しかし、現在はグローバル化と少子化によって、大学の英語教育は大きく変わりつつあります。多くの大学ではかつてないほど学生の英語力を伸ばすために努力しています。英語を媒介にした授業を行う大学が増えてきました。積極的に学生を海外に送り出す大学も増えています。そのような中で、高校の英語教育の役割が変わりつつあります。5割を超える高校生が大学に進学する現在、生徒は英語の基礎として何を習得する必要があるでしょうか。本論では、私自身が現在取り組んでいる、大学生を海外の大学に留学させる英語プログラムの取り組みから英語の基礎力を考えていきます。また、その基礎力に本教科書である『MY WAY English Expression Ⅰ・Ⅱ』がどのように対応しているのかについても述べます。留学というと、英語教育とは別次元の分野であり、一見日本の教室における英語学習とは関連が薄いように思われます。しかし、留学を生徒が高校卒業後にコミュニケーションとして英語を使う一つの場面であると定義すると、高校の英語で何を学ぶべきかというヒントを与えてくれます。

2. 英語圏留学派遣プログラムの実践から

私の所属する学科では、学生が2年次秋学期から3年次春学期まで約1年間英語圏の28の大学に留学することを義務づけています。政府が進めるグローバル事業の活性化とともに、短期及び長期を含めてこのような大学生を海外に留学させる取組が増えてきました。日本から海外への留学生の数が減ったというマスコミの報道がありますが、それは4年間留学する学生の数が減っているのであり、4週間程度の短期の語学研修を含めるとむしろ増えている傾向にあります。高校でも短期及び長期を含めて、海外に生徒を送り出す学校が増えてきました。このような傾向は、語学留学を含めた留学が大学ではもちろんのこと、高校でも特別なことではなくなってきたことを示唆しています。

では、どのような学生が留学を含めた4年間で最も英語力が伸びるのでしょうか。大学入学前に留学経験のある学生の方が留学には有利だと思われる人もいるでしょうが、実はそうではありません。もちろん大学入学以前に留学経験があり、現在海外の大学院で勉強している卒業生もいます。しかし、高校時代に留学した学生は多くの場合英語を使った日常のコミュニケーションはできますが、学問的な文章やレポートを英語で読み書きすることは苦手な傾向があります。むしろ留学したことはないが、チャレンジ精神が旺盛で、英語以外の教科にも熱心に学習し、英語の文法や語彙力等の基礎を身につけてきた学生の方が4年間で大きく伸びる傾向があることがわかりました。

学生を英語圏に送り出すプログラムの実践と研究を始めて、現在8年目を迎えます。その試みの中で、英語の言語面、情意面、内容面に関わる基礎力が重要であることがわかりました。英語の基礎力とは、上記の3つの面に関する基礎的な力をバランスよく持ち、特に情意面と内容面では、チャレンジする精神を抱き、他の教科も意欲的に学習しようとする態度が重要です。言語面に必要な能力はfluency（流暢さ）とaccuracy（正確さ）です。よく高校までの6年間も英語を勉強したのに、英語でコミュニケーションをすることさえできない、という典型的な不満を聞きます。この不満には自分の失敗を他人の責任に転嫁する態度が見られますが、それを無視して一言で言えば、fluencyを養成してこなかったことが原因です。一方、英語の本が正確に読めない、きちんとした英語で文章が書けない、と言われるのはaccuracyを習得できなかったことが原因です。結論から言えば、accuracyを基本にしてfluencyを養成することが重要です。言語面のaccuracyに関して重要なことは、英語の仕組みを理解することです。英語の仕組みとは、英語の文型、文法事項、語彙力、文と文のつながり、パラグラフの概念を指します。留学と聞くと、すぐに英語で話せることが重要であると思いますが、そうではありません。口頭での技能を伸ばすことは重要ですが、むしろ英語の仕組みがしっかりと身についていないと、せっかく留学しても日常のコミュニケーションの段階で終わってしまいます。最終的に高度な英語力に到達できません。また、留学中にそのような基礎的な仕組みを学ぶのは非常に効率が悪く、無駄が多いのです。英語で英語の仕組みを理解するのは、ある程度の高いレベルの英語力がないと無理なのです。その理由は認知的に負荷がかかるからです。

しかし、accuracyだけでは不十分です。accuracyに基づいたfluencyを身につけておくことが重要です。1年間の留学から帰って来た学生は、留学に行って初めて英語を話す時は、正確さよりも単語を並べるだけでも日常会話が通じることを体験して来ます。それは、英語を使わざるを得ない状況に置かれるからです。学生は留学によって、生きていくために英語を使わなければならないのです。また、見知らぬ人との対話や文化や生活習慣の違いから生じる様々なトラブルに巻き込まれながら、それを解決する中で、悲喜こもごものやり取りを通して、コミュニケーションの重要性を体得していきます。確かにこの体験は貴重なものです。留学してこそ身につくものです。しかし、別な見方をすれば、留学をしなくても日本の教室内で、ある程度fluencyを身につけることは可能です。たとえば、教室内でfluencyを重視したtaskを実施し、生徒の発言を促すように積極的に働きかければ、生徒はある程度その力を伸ばすことができます。ただ、fluencyはaccuracyを前提とします。もちろん、accuracyからではなく、fluencyから入って身につけていく人もいるでしょう。しかし、日本のような主として英語を外国語として学ぶ状況では、accuracyから入る方が能率的で、確実です。

言語面だけでなく、情意面も重要です。情意面とは外国語に対する態度、動機づけ、不安等の学習者の感情面のことを指します。何となく留学したいからという曖昧な動機づけを持っている学生の英語力はあまり伸びません。将来の目標が明確で、何のために留学するかを説明できる学生は1年間の留学でも飛躍的に英語力を伸ばします。また、言葉は情意面と密接な関わりがあります。そのため、先生の一言で学習意欲が高まったり、下がったりします。流暢に英語を話す友人を見て、実際の能力以下に自分の英語能力を卑下する生徒が多いのです。英語を学ぶ意義や動機づけ、そして英語力が伸びていることを実感させるような生徒の情意面に配慮した指導も大切です。

最後に、コミュニケーションをするためには伝達するための内容が必要不可欠です。留学中、学生は親しい友人とコミュニケーションをとる中で、話題や知識である内容を持っていないと話せないことに気づきます。留学中の大学で正規科目を受講する多くの学生は高校時代に学んだ知識がないと、大学の授業についていけないことを実感します。多くの日本人が海外で母国のことを知らないことに気づき、帰国後日本のことを勉強しようとするのは、内容の大切さに気づかず、単におしゃべりができればよいと安易に外国語学習を考えている場合が多いのです。以上、英語の基礎力を留学の実践と研究を参考に言語面、情意面、内容面について考えてきました。次に、それらが本教科書でどのように扱われているのかを考えてみましょう。

3.『MY WAY English Expression Ⅰ・Ⅱ』で基礎力をどう伸ばすか

上記の3要素の中で、情意面に関しては、教科書での扱い方はやや困難です。教科書の題材や例文、その説明、Grammar for Communicationのセクション、効果的な写真の利用等で生徒の英語に対する興味を引き出すことはできますが、やはり実際に教室で教えられている先生の指導には敵いません。生徒一人ひとりを知っているからこそ、生徒のやる気を引き出せるのです。

教科書で扱うことができ、英語の基礎力を養成する際に最も重要なものは言語面です。この教科書では、場面を重視したシラバスや機能・概念重視のシラバスではなく、基本的に文法シラバスで構成されています。その理由はaccuracyを重視するからです。文法シラバスに関しては短所もありますが、日本人学習者にとって体系的に学べるという利点があります。日本語と英語は文法体系が異なる言語であるため、英語の文法の全体像を把握する必要があります。従来の文法教科書の問題は、機械的な説明、そして機械的に練習問題を解くことに終止している点です。本教科書では、Unitという文法事項のまとまりを作り、その中で体系的かつ意味を重視した文型·文法の指導ができるように工夫しました。また、中学から高校への橋渡しに配慮しながら、英語の基礎的な文法、語彙、表現を体系的に学べるようにしています。特に表現する際の論理性にも配慮し、パラグラフ・ライティングについても扱っています。『MY WAY Ⅰ』では、Write a Paragraph!という活動が設けられています。この活動の目的は、文と文とのつながりを意識させ、Use!で行ってきた1行英作文を3行の最小のパラグラフにすることです。この活動は『MY WAY Ⅱ』で、本格的なパラグラフ・ライティングにつながります。『MY WAY Ⅱ』で扱うパラグラフの基本は、「例示·列挙」「分類」「比較·対照」「原因・結果」「分析」です。Learn!でパラグラフの基本を学び、Practice!で練習問題を解きながら、段階を踏んで最終的にパラグラフが書けるように工夫してあります。

一方、fluencyに関しては、毎回の文型・文法事項の基礎的な練習から、それらを使って自己表現できるようにする過程の中で身につけられるようにしました。本教科書ではaccuracyとfluencyが有機的に結びつけられています。両方の力を養うために、本教科書では1つの課に様々な活動が含まれています。毎回のレッスンでは、生徒は写真を見て正しい英文を選ぶlisteningの活動から入ります。全体的にはaccuracy中心の活動ですが、最後のUse!の段階で生徒は目標文法項目を使って英語の文を書き、それを基に発話します。ここで、fluencyを育てます。時には誤りを気にせず、発表させたいものです。Unitの終了時点では、Project Workというコミュニケーション活動を取り入れています。また、『MY WAY Ⅱ』の最後には、discussionやdebateの活動があります。これらの活動については、どのようなレベルの生徒でも取り組めるようにできるだけ易しくしました。「私の学校の生徒には無理だ」ではなく、「私の学校の生徒にこそ必要である」という気持ちで取り組んで下さい。目的はaccuracyではありません。一言英語を発することでいいのです。原稿に基づいて話してもよいでしょう。生徒は自らの意見を述べる体験をすることが大切です。このことがfluencyの基礎となります。

内容面に関しては、レッスンごとに様々な題材（トピック）を設定し、生徒の記憶に残り易く、生徒にとって身近な題材について表現し易いように配慮しました。また、Use!やProject Workでも生徒の身近な題材を取り上げ、自分の意見等を表現し易いように配慮しました。この題材を他の教科や生徒自身の関心を高めるように発展的に指導することも可能です。

4. おわりに

本論では私の実践を通して、英語の基礎力を言語面、情意面、内容面について考えてきました。授業ではaccuracyとfluencyのバランスを保つことがポイントです。全くaccuracyを無視したfluency の活動も時には必要でしょう。accuracyに配慮しながら、時にはfluencyの要素を取り入れ、生徒の情意面に配慮し、生徒の発想を活かしながら授業を進めたいものです。

英語アレルギーを克服するために

成城大学　井 上　徹

はじめに

『SELECT English Expression Ⅰ』（以下、『セレクト表現』）は、基本的な文法事項が英語表現でどのように使われるのか学びながら、英文法の基礎・基本を確実に習得しようとしている高校生のために編集したものです。『セレクト表現』は「英語表現Ⅰ」の教科書ですので、主に「話す」「書く」活動を通じて、自己表現や発表をするために必要な要素を様々な角度から学習できる構成になっています。特に英語を苦手としている生徒や英語に自信が持てない生徒たちがこの教科書で英語の基礎的分野を繰り返し練習し、これまでつまずいてきた事項を発見し、不安な事項を克服できるように編集してあります。

本稿では、まず、高校生にとって必要な英語の基礎力とは何かについて触れ、将来に向けてどのような基礎力を身につけておけばよいのかを考えます。次に、そのような基礎力を伸ばすために『セレクト表現』で配慮したことを説明します。

英語の基礎力とは何か？

「英語の基礎力とは何か？」と問われて、即答できる人は多くないでしょう。英語の基礎力という用語は漠然としていて、捉えどころのないものだからです。英語の基礎力といっても「基礎力」の捉え方は人によっていろいろあり、学んだ単語や文法が理解できれば基礎力が身についたと考える人もいれば、学んだ単語や文法を使うことができて初めて基礎力が身についたと考える人もいます。

いま仮に中学校で学習する内容を英語の基礎としましょう。中学英語は基本中の基本であり、やさしいというイメージを持っている人が多いと思いますが、実際には、語順、品詞、発音など、日本語と英語が持つ根本的な違いにより、決してやさしいものではありません。日本語に慣れた私たちが英語を話す場合、どうしても音声面で母語の干渉が障害になりますし、英語の文構造や文法事項に習熟する際にも文法面で母語の干渉が障害として働くからです。考え方としては、中学英語が理解できれば基礎力が身についたと考えるでしょうか。それとも中学英語を使うことができて基礎力が身につけたと考えるでしょうか。筆者は中学英語を使うことができて初めて基礎力が身についたと言えると考えています。『セレクト表現』では様々な問題演習や言語活動を通して、実際に使うことができる基礎力が身につけられるような工夫がなされています。

高校生にとって必要な基礎力とは？

中学校と高校の段階で定着すべき基礎が、単語や連語、文構造や文法事項、そして発音に関する知識であることに異論を唱える人はいないでしょう。これらを土台にして、聞くこと・話すこと・読むこと・書くことという基本的なスキルが形成され、さらに発音・語彙・文法の正確さや流暢さ・複雑さといった運用能力が加わって「実践的コミュニケーション能力」が形成されると考えられるからです。

では、高校生にとって必要な基礎力とは一体何でしょうか。まず、基本単語や連語が書けて読めることです。次に、文構造と文法事項の基本を理解していることです。高等学校の段階では、中学校で学んだ文法の基本を確認しつつ、場面を重視した一歩進んだコミュニケーションのための学習英文法を効率的に学び、その知識を活用して話したり書いたりすることでしっかりとした基礎力を作る必要があります。というのは、英文法の様々な項目からなる英語表現は、当然、言語使用と結びついているからです。たとえば、自分の予定や計画を表現しようとする場合、be going toなどの未来表現が必要になってく

るはずです。文法形式の理解を中心に学んできた文法を日常生活の場面に結びつけて捉えるようにすると、これまで学んできたbe going toとは違った理解の仕方が可能になり、be going toの用法や関連する表現との相違点にも目が向く効果が期待できるかもしれません。このことは「文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連付けて指導すること。」という新学習指導要領の考え方と一致するものです。

将来に向けてどういう基礎力をつけておけばよいのか？

実践的なコミュニケーションを行うためには、語彙や表現、文法が頭の中から必要なときにすぐに取り出せるようなところまで自動化されていなければなりません。自動化するための特効薬のようなものはなく、ある一定の期間に渡って繰り返し練習するしかありません。

反復練習と学習の継続というとすぐ機械的に暗記することを思い浮かべますが、単に暗記するのでは学習は長続きしません。上で触れたように、話し手と聞き手によって意味のある状況を作り、授業の中で繰り返し練習することによって、コミュニケーション能力の獲得につなげるのです。

また、実践的なコミュニケーションというと、話したり聞いたりすることを連想しがちですが、音声だけでなく電子メールなどの文字を介したコミュニケーションの機会は今後さらに増えていくと考えられます。就職してからは英語のビジネス文書を読んだり書いたりすることが、留学したらレポートや論文を書くことが避けて通れません。話したり聞いたりするだけではなく、読んだり書いたりする能力もコミュニケーションに大きな役割を担います。将来のことを考えて身につけておきたい基礎力とは、語彙や文法を土台として4技能を総合的に活用できる能力ということになります。

『セレクト英語表現』で身につける基礎力とは？

本教科書で英語の基礎・基本を学ぶために配慮したことは、上で述べたように、中学で一度学んだ英文法を、場面を重視したコミュニケーションのための学習英文法の立場から見直すことです。扱う文法項目の中でこれだけは覚えてほしいというものを「セレクト英文法36」として絞り込んだうえ、ことばによる説明を最低限にとどめ、英文法のイメージを視覚的に捉えられるようにしました。

文法項目を実際に使えるようにするためには、知識と経験の両方が必要です。知識と経験のどちらかが欠けていても身につきません。習ったものを忘れるのが人間ですので、繰り返し教え、繰り返し使わせることで、達成感を持たせるようになっています。

「習った英語は使わせる、表現させてみる」という趣旨のもと、「イントロ英会話」という会話の中で、ターゲットとなる文法を使用した表現を導入します。「イントロ英会話」で導入された文法事項は、「セレクト英文法36」のキーセンテンスとイラストで理解を深めます。一例を示すと、現在完了形の完了の用法を扱うレッスンでは、“I have already done my work.” というキーセンテンスとともに、過去のある時点でドアにペンキを塗る作業が始まり、今ではその作業が完了している様子がわかりやすくイラストで示されており、文法の特徴を視覚的に理解できるように工夫してあります。

「セレクト英文法36」で学んだことが理解できたかどうかは、すぐに「瞬間チェック」という2択または3択問題で確認します。「瞬間チェック」では、セレクト英文法を機械的に丸暗記するのではなく、平易な問題演習を通して「できた！」「わかった！」という自信や安心感を与え、楽しい英語の世界へ一歩踏み出せるようになっています。

「瞬間チェック」に続く欄外では、「英語で何と言う?」というミニコーナーを配置しています。このコーナーでは、各レッスンの文法項目を含む、言えそうで言えない英語表現を紹介しています。たとえば、willとbe going toを学習するレッスンでは、漫画『美少女戦士セーラームーン』で主人公が言う決めぜりふ「月に代わっておしおきよっ！」の英訳である “On behalf of the moon, I will punish you!” が紹介され、学んだことがこんなふうに使えるということが自然にわかるようになっています。

次の「Let’s Listen」では、教科書の写真を見ながらリスニング問題を行います。ここで聞く3つの英文の一つにはセレクト英文法で扱った文法事項が含まれています。さらに、「Gトレ（ーニング）」では各レッスンの文法とテーマに沿った問題文で基礎の定着を図ります。続く「場面でGo!」では、セレクト英文法に関連した丁寧表現や場面にあった英語表現を2択問題で学習します。（例：ホストファミリーに「自転車をお借りできますか」と丁寧にたずねるとき。（Can / May）I use your bike?）なお、各表現が使用される場面の説明にはヒントとなることばに下線をつけ、無理なくネイティブ感覚の英語表現が身につけられるようになっています。

各レッスンの最後には、当該のレッスンで学んだ英文法を用いて、会話形式で自分のことを英語で表現する「Speak Up!」を配置しています。このコーナーには「toolbox」と名づけた表現例を置き、英語の苦手な生徒でも、学んだことをすぐに使ってアウトプットできるように配慮されています。

なお、課間活動として4レッスンごとに「Gトレプラス」、「つなぎ言葉ランキング」、「Speaking Station」、「Daily Conversation」を配置しています。「Gトレプラス」は本課の「Gトレ」のプラスαとして、問題を解きながら本課で学習した文法に繰り返し出会えるように、工夫がなされています。

「つなぎ言葉ランキング」では、and, but, becauseなど、文と文を結びつけ、文章全体の結束性を高める際に欠かせない接続詞10個の用法をわかりやすい例文と直感に訴えるイラストで解説しています。また、読んだり聞いたりしながら、テーマに沿った「情報や知識を取り入れ」、「自分の考えをまとめ」、「自分の意見を発表する」というアウトプット活動に生徒が主体的に取り組める教材として、「Speaking Station」を設けています。このコーナーでは、手順に沿って発表するための表現や音声のポイントを押さえながら、パラグラフ・ライティングの基礎も学べるように工夫がなされています。さらに、新学習指導要領の趣旨を生かした総合的な言語活動として、「Daily Conversation」を3回分設けています。このコーナーでは、本課で習った文法事項を使って、買い物、レストラン、道案内の場面でよく使われる会話表現を学べるようになっています。

以上のように、『セレクト表現』では学習した文法事項を様々なコーナーで繰り返し、スパイラルに使わせるように工夫し、基礎・基本の定着をねらっています。

おわりに

本稿では、「基礎力」をキーワードに、高校生が身につける英語の基礎力について考え、英語の基礎・基本を身につけるために『セレクト表現』で配慮してきたことを述べてきました。

本教科書では、①できるだけシンプルにできるだけ面白く文法事項を導入する（理解可能なインプット）、②どの生徒もマスターでき、学習の継続を促すような平易で興味深い内容にする（学習の動機づけ）、③習った文法事項は、書いたり話したりする演習や言語活動を通じて徹底的に使わせ、理解の定着を図る（反復学習と応用による大量のアウトプット）、という趣旨のもと、文法項目の基礎力が身につけられるようになっています。語学学習の難しいところは学習の成果がなかなか見えにくいことですが、だからこそインプットだけでなく、学んだことや覚えたことをすぐに使ってアウトプットしてみることが大切です。本教科書は、話す活動と書く活動をバランスよく取り入れ、どの生徒にも自分もやればできるという達成感を感じられるように配慮されています。『セレクト表現』で扱っている文法の多くは中学で学習した項目ですが、この一冊を学び終えたときには、英文法に対する「わかったような、わからないような」というモヤモヤ感は消えているはずです。本教科書で学んだことが、これからの英語学習を支える大きな力になることを心から願っています。

2014年度 センター試験の分析と対応

渡辺　聡

東京学芸大学附属特別支援学校

筆　記

1. 全体的な傾向

今年のセンター試験［筆記］でもコミュニケーション能力と読解力を試す出題がされた。設問形式が若干変わった箇所があるが、全体的な傾向は変わっていない。レベルとしては例年通り基本的な問題が多く、平均点は118.87点と、昨年度の119.15点とほぼ同じであった。総語数は昨年度とほぼ同じ約4,200語だった。

コミュニケーション能力をみる問題としては、

第1問A：単語をきちんとした音で発話する能力

第1問B：単語を正しいアクセントで発話する能力

第2問B：対話がスムーズに流れるよう、適切な発話を考える能力

第3問A：初出の単語や表現でも、全体の流れから意味を類推する能力

第3問C：発言の内容を要約する能力が例年通り求められている。

また、読解力では

第3問B：パラグラフ単位で文章の構成を論理的に思考する能力

第4問：グラフや表、説明文を参考にして文章を正確に読み取る能力

第5問：画家とその孫の手紙と日記を読み、英文やイラストを正確に把握する能力

第6問：論説文の流れを正確に追い、論の展開をつかみながら長文を読み取る能力

が試される。いずれも、文章の全体的な流れをつかんだ上で、的確な情報を読み取る日頃の学習姿勢が問われる。

2. 具体的内容分析

＜第1問＞

形式と問題数、配点は昨年度と同じ。

A　発音（6点：解答数3）

基本的な単語の発音（母音が2問、子音が1問）を問う問題。カタカナにしたときの発音に惑わされやすい語（glove、onion、oven〔問1〕、casual、classic、label〔問2〕、loose〔問3〕）も例年通り複数出題された。

B　アクセント（8点：解答数4）

単語のアクセントのある箇所を問う問題。昨年度と同様、今年度も2、3、4音節の語が出題された。カタカナにしたときのアクセントに惑わされやすい語（parade、rescue〔問1〕、category〔問4〕）も例年通り複数出題される等、個々の語の正確なアクセントが問われる。

＜第2問＞

形式と問題数は昨年度と変わらず。配点はBが3点増えた。

A　語彙、語法、文法（20点：解答数10）

語彙、イディオム、動詞の用法等を判断する問題。時制の問題（Ever since they first met at the sports festival, Pat and Pam have been emailing each other.〔問2〕）や使役動詞、知覚動詞の用法は頻出である。イディオムやコロケーションの力を併せて要求する問題（whether ～ or〔問3〕、take it for granted that ～〔問5〕、add up〔問7〕、make ends meet〔問10〕）も相変わらず多い。基本的な動詞や副詞の使い分け方（tellとteach〔問6〕、everとonceの違い〔問9〕）、関係詞、不可算名詞や同義語等の幅広い知識も合わせ持っておきたい。

B　対話文完成（12点：解答数3）

対話文を完成させる問題。発話数は5～6。空欄で何を言っているのかを次のせりふから導き（laterからJust use my phone.を〔問3〕）、代名詞（that〔問2〕）の指す内容を文脈から考える。会話でよく使われる表現（Oh, come on!、Either is fine with me.〔問1〕、Oh, dear.〔問2〕）に慣れておくことも大切である。

C　語句整序（12点：問数3、マーク数6）

各文の中に含まれる語彙・語法を使い、意味の通る文にする問題。空所の数が全て6になり、3問とも対話形式（昨年度は2問）である。動詞の用法（advise＋O＋to～〔問1〕、talk＋O_1＋into＋O_2〔問2〕）や付帯状況等、文法の知識も併せて確認しておきたい。

＜第3問＞

Bが不要な文を選ぶ形式になり、Cが発言の意図を問う設問になった。Aの配点が各1点減り、全体で配点が5点減った。

A　語やフレーズの意味類推（8点：解答数2）

下線部の単語やフレーズの意味を全体から類推する問題。対話やパラグラフの中でどのように論が展開しているか、状況が推移しているかを正確に読み取り、ヒントとなる語（句）を探して想像力を働かせる。

B　不要文削除（15点：解答数3）

各段落のまとまりを良くするために取り除いた方がよい文を1つ選ぶ問題。

最初の文からキーワードをつかみ、最後の文でまとめとなるような構成を考える。代名詞や指示語、接続する語（句）や順序を表す表現（First, Second, The most important thing is ～〔問3〕）に注意を払い、論が正しく展開するよう当てはめていく。

C　発言の意図の要約（18点：解答数3）

3人の発話の要旨を選ぶ問題。ある事柄を別の表現で言い換えている（to look at something from various perspectivesをto consider things from different points of view〔空欄34〕）ことが多いので、発言の主旨を理解し、まとめる柔軟な読解力が必要とされる。

＜第4問＞

形式は昨年度と同じ。Aの設問数が1増えた。配点はAの設問が各5点になった。

A　グラフ読み取り問題（20点：解答数4）

本文とグラフや図を参考に、展開される論から的確な情報を得る力を問う問題。本文で与えられた情報を順次グラフに当てはめ、情報の内容を言い換えた表現を読みこなす。第1段落の第4文のthese residentsが指す内容（前の文）と、選択肢④が同じ内容であることを読み取れるか〔問1〕。グラフには上位と下位の数州ずつしか載っていない等、細かい点も見落とさないようにしたい。

B　ウェブサイト読み取り問題（15点：解答数3）

ウェブサイトから適切な情報を読み取る問題。設問を読み、与えられた条件をもとに、合致する情報がどこにあるのかを探し出していく。問いに関する情報は上から順に出てくるわけではないので、設問の求める情報がある箇所（複数の情報を合わせる場合もある）を的確につかむことが大切である。

＜第5問＞（30点：解答数5）

形式と問題数、配点は昨年度と変わらず。

2人の日記と手紙から、事実の確認とそれぞれの考え方の違いを読み取る。Salvadorの1段落6文のWhen she paints a person, too often she paints an idealized image rather than the real person. やChitoseの3段落2文のYou didn't like it and told me to paint you as I saw you. 3段落4文のI should paint things as they actually are ～. の意図が、選択肢ではSalvador wanted Chitose to appreciate things for how they are.〔問1〕で表されている。それぞれの発言から、ある事項に対する考え方を丁寧に拾い上げる力が求められる。

＜第6問＞（36点：問数6、マーク数9）

形式ではA、Bに分かれ、Aでは内容把握、Bでは表を埋める形式で段落の要旨を選ぶ問題である。問題数、配点は昨年度と変わらず。

各段落の内容を正確に読み取り（設問A）、段落の要旨を順に並べ替える設問（設問B）の2本立て。各段落のポイントをつかみ、話がどのように展開し、主題は何か、という広くかつ深い読解力が求められる。また、正解の選択肢は本文で使われていない単語や表現で求められる場合も多いので、基本的な類義語を理解する力も必要である。

3. 昨年度から変化のあった点

❶配点
- 第2問Bが各4点になり（昨年度は各3点）、第2問で計3点増えた。
- 第3問Aが各4点になり（昨年度は各5点）、Bが各5点になり（昨年度は各6点）、第3問で計5点減った。
- 第4問Aで設問が1つ増えた。配点は各5点になり（昨年度は各6点）、第4問で計2点増えた。

❷第1問Aで母音が2問、子音が1問になった（昨年度は母音が1問、子音が1問、黙字が1問）。

❸第2問Aで問8～10の空所が各2ヶ所になった（昨年度は各1ヶ所）。

❹第2問Bで発話数が5と6に増えた（昨年度は全て4）。

❺第2問Cで空所の数が6に増え（昨年度は5）、解答する場所が2番目と5番目（昨年度は2番目と4番目）になった。また、3問とも対話形式になった（昨年度は対話形式が2問、平叙文が1問）。

❻第3問Bで、昨年度までのCの文補充の設問が、不要な文を選択する新形式の設問になった。それに伴い、発言の意図を問う設問がC（昨年度はB）になった。

❼第4問Aの設問数が1増えて4になった。

❽第5問のイラスト問題が内容に合ったイラストを選ぶ設問になった（昨年度は場面の順序を問う設問）。

❾第6問Bの空欄が4つになった（昨年度は5つ）。

4. 新しい傾向が見られる点

❶第2問Aで、文中の2つの空所に入れる適切な語の組み合わせを選ぶ設問が3問あった。

❷第3問Bが不要な文を選択する設問になった。

❸第4問Aの問4で、最後の段落に続く内容を選ぶ設問があった。

5. 日頃の学習で大切なこと

❶多面的に語彙を増やす

ただ単に単語の1つの意味だけを覚えるというのではなく、英語での定義、反意語、同義語、接頭辞・接尾辞、品詞の転換、自動詞・他動詞等、語彙を様々な方法で多面的に増やしたい。語彙に関連性を持たせると、未知の語に遭遇したときにも想像力を働かせてなんとか意味がつかめるようになる。カタカナになっている語の英語と日本語の意味の差異や発音・アクセントに注意して覚えるのも1つの方法であろう。

❷語と語のつながり（語法、Collocation）に関心を持つ

ある単語を頭に入れる際、その語がどのような語と一緒に使われる場合が多いのか、英語としての語と語の自然なつながりに気を配る習慣を身につけておきたい。単独だとイメージしにくかったり、覚えにくいような単語も、自分が理解しやすい組み合わせなら、より効率的に身につくであろう。

❸英語を聞き、自ら口にする

アクセント、強勢、構文（主語と述語の区切れや省略等）に注意を払って日頃から英語を聞き、音読をする。単語一つ一つの音に注意を払い、全体の内容を理解しながら読み進む。何回も繰り返して読み込んでいけば、何よりも英語の音に対する興味・関心が必ずや増し、同時にリスニング試験の対策にもなり得る。

❹わからない語があっても、前後関係からその意味を類推する習慣をつける

全ての単語の意味がわからなくても主旨は理解できる、と余裕を持って文章を読み進めたい。未知語に出会うとすぐに辞書で意味を調べる読み方をしていると類推力、想像力が身につかなくなってしまう。

❺論理展開を重視した読解力を養う

どんな読み物でも最後まで通して読み、論の展開がどのようになっているかを段落中心に考える。接続語を手掛かりに、段落がどのように構成されているか、全体の論調を捉えてから各パラグラフのキーセンテンスを探し、要旨をまとめる。「木を見て森を見ず」にならない大局的な読み方を心掛けたい。

❻多読を心掛ける

80分で4,000語を超える分量の英語を読みこなすには、普段から500～1,000語の文章をある程度のスピードで読むことを習慣とすることが大切である。授業では精読を中心に行っていても、時には様々な分野、テーマ、形式の、比較的易しい文章に多く触れるような機会を与え、分量をこなす読み方も覚えさせたい。

リスニング

1. 全体的な傾向

過去5年間ほぼ同じ出題形式である。解答数、配点いずれも昨年度と同じである。読まれる総語数（1,100語強）は昨年度とほぼ同じ。読み上げ速度は昨年度とほぼ同じで自然な感じであるが、音声面でのリダクションもあり、聞き取りにくい箇所もあったと思われる。問題音声も設問ごとに2回流された。比較的素直に英語の内容を問う基本的な問題で、平均点は昨年度より上がり（今年度33.16点、昨年度31.45点、一昨年度24.55点）、過去5年間で最高となった。

2. 具体的内容分析

＜第1問＞対話ビジュアル（12点：解答数6）

✤男女2人の対話を聞き、適切なイラスト、単語、アルファベット、数字を選択する

✤各対話の総語数：30語前後

イラスト（表）を選ぶ設問、数値を聞き取って計算をする設問は昨年度と同じ各2問である。対話がいつ行われているのかを問う設問（問2）も昨年度同様、1問出題されている。最初のせりふで状況を大まかに把握し、2番目～4番目のせりふのキーワードをたよりに、求められる情報を的確に探し出す。対話に出てくる語（句）や数字がそのまま答えになるとは限らず、簡単な計算をする設問もある。一部を聞き逃すと正答に結びつかない設問（all capital letters〔問3〕、I also have two to China.〔問4〕）もあるので、せりふの細部まで集中して聞く姿勢も問われる。

＜第2問＞対話応答補充（14点：解答数7）

✤対話を聞き、最後の発言に対する相手の応答を選択する

✤各対話の語数：20語弱～30語弱

相手の述べたことへの自然な反応を考える。疑問文で終わる対話の設問が3つあった（昨年度は2つ）。最初の2つのせりふから会話の場面や状況を想像できるようにしたい。また、See?（読み上げ文）〔問8〕、Sounds good.（読み上げ文）〔問9〕、No problem.（選択肢）〔問10〕、I'm off to school, hand in（読み上げ文）〔問12〕、Guess what?（読み上げ文）〔問13〕等、日常会話でよく使われるフレーズにも慣れておきたい。

＜第3問A＞対話内容Q&A（6点：解答数3）

✤対話を聞き、その内容についての問いの答えを選択する

✤各対話の総語数：50語前後

5W1Hで始まる質問の答えを対話から探す。せりふの数が8に増えたものが出題された（昨年度は5か6のみ）。対話を最後まで聞き、状況や流れの変化をきちんと捉える。事前に選択肢を読み、最初のせりふを聞いた段階で場面が想像できるようにしたい。話者が相手に同意しているのかそうでないのかといった話の流れをつかむ力とともに、選択肢のsweetsがせりふのa doughnutの言い換えであることを理解し〔問14〕、せりふのRight.を男性が“右”の意味で聞いてしまった〔問16〕といった内容を正確に把握する力も求められる。

＜第3問B＞対話ビジュアル（6点：解答数3）

✤対話を聞き、その内容からわかることを表の空所に埋める

✤対話の総語数：約140語

聞き得た情報を順に図表に当てはめていく。今年度は違うが、簡単な計算をしたり選択肢が数字であったり、指示代名詞が何を指すのかを考えなければならない場合もある。また、情報は上から順に出てくるとは限らない（解答欄18が一番最初に埋まる）ので注意が必要。

＜第4問A＞

Short Passage 内容Q&A（6点：解答数3）

✤Short Passageを聞き、その内容についての質問を読み、答えを選択する

✤各せりふの総語数：100語弱

問20

If you're going to Machu Picchu in highland Peru, you should consider visiting Cuzco, at 3,400 meters above sea level. You will enjoy walking through the Plaza de Armas and visiting the Temple of the Sun. You can also look at Cuzco's interesting museums and beautiful houses as well as its magnificent churches. Remember, however, that these churches close

for a few hours around noon. In addition, you can take advantage of modern hotels and restaurants, and at the same time, see Cuzco's fascinating history preserved in its architecture, language, and ancient treasures.

質問文から事前に推測した状況をもとに、出てきた情報を一つ一つ積み重ねていき、求められる情報の所在を明らかにする。選択肢では答えとなる語を別の表現で言い換えたり、まとめることがある（上記下線部をEnjoy modern and historical attractions.に〔問20〕）場合も多いので、要点をつかむ力も求められる。

＜第4問Ｂ＞説明文内容Q&A（6点：解答数3）

✤説明文を聞き、その内容についての質問を読み、答えを選択する

✤説明文の語数：約200語

質問文に目を通し、事前にどれだけの状況を想定できるかがポイント。あとは話の流れに沿って順に問題に当たっていく。全体の内容を総合的に理解する力と、求められた情報を正確に取り出す力が必要であるが、ここでも選択肢では答えとなる箇所が別の表現で言い換えられている（Young children learn about their family history, がThey learn something about their family roots.に〔問24〕）ことも多い。話の流れが変わったり固有名詞も出てくる場合もあるので、メモを取りながら質問されるポイントの箇所を絞って聞くことも大切である。また、1回目と2回目の読み上げの間に約45秒のポーズがあるので、情報が出揃った段階で各問の答えを絞り、2回目は確認の作業に当てたい。

3. 対応のポイント

❶状況・場面を想像し、話の流れをつかむ

事前に問題指示文、選択肢、イラスト、状況説明文等に目を通し、内容を予測してから英語を聞く。複数の方法が提示され、途中で展開が変わり、最初に出てきた情報が最後まで同じとは限らない。方向性を予測した上で、最後まで丁寧に流れを追いたい。

❷英語特有の表現に慣れる

話の展開がつかめれば自然に聞くことができるが、〔問8〕、〔問12〕、〔問13〕のようなフレーズは聞けるだけではなく、意味が自然に頭に入るまで聞き慣れておくようにしておきたい。

❸言い換えの表現を読み取る

リスニングと言っても選択肢を読み取る力は筆記試験同様に要求される。聞き取る英語の表現がそのまま選択肢に入っているとは限らなく、ある表現を別の形で言い換えている場合も多くある。正答の鍵となる情報をきちんと整理する力もつけておきたい。

❹全部完璧に聞き取れなくても良しとする

筆記試験で英文を一字一句完璧に理解する必要がないのはリスニングにおいても当てはまる。リスニングでは、聞き取れなかった箇所で悩み込んでしまうと次を聞き逃すことになる。たとえ理解できなかった部分があってもそのまま流し、「残りからさかのぼって推測すればいい」と思うくらいの余裕が欲しい。

4. 日頃の学習で大切なこと

❶英語の音を聞き、その音を口にする活動を習慣にする

「継続は力なり」と言われるように、1日5分間でも英語を聞き続けることが大切である。様々なメディアを使って英語の音やリズムを継続的に耳に入れておくことを習慣としておいた上で、その音を真似して口に出す活動を続ける。次第に英文の流れが、意味を伴った内容となって頭に残ってくることになるであろう。

❷聞いた内容を論理的に組み立て、考える力を育てる

リスニング力をつけるには、聞いた音を頭の中で論理的に組み立て直す作業が必要である。教科書等の、ある程度分量がある文章の内容を理解した上で英語を聞き、論の展開をつかむ。そして音読、Qs & As、dictation等の基本練習を日頃から行い、論理的思考力も養っておきたい。

❸自分のことばで実際に表現する機会を増やす

コミュニケーションが成立するためには、お互いの考えをきちんと伝え合うことが必要である。まずは相手の伝えたいことを理解する。その次の段階として、自分の意見や考えを自分のことばで実際に表現する活動を増やしていきたい。

CROWN クラウン総合英語 第2版

採択No.1教科書CROWNの代表著者が編集した

最強の総合英文法参考書!

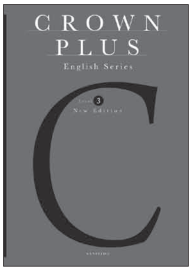
霜崎 實[編著] 1,450円

A5判／オールカラー・648頁(本文608頁,解答40頁)

- ■ 基礎から発展まで重要事項を網羅。
- ■ 導入編・基本編・発展編の学習しやすい3段階構成。
- ■ 生き生きとした例文,要点を押さえた解説。
- ■ 理解をさらに深める豊富なコラムを収録。
- ■ 重要事項が見つけやすい機能的な紙面デザイン。
- ■ 大学受験に,TOEIC・英検対策に最適。

CROWN PLUS English Series

中高一貫教育にも対応した中高生向け英語テキスト

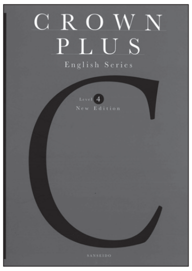


New Edition
CROWN PLUS Level 3

高校学習指導要領改訂に伴う新版テキスト　主対象 高1・高2

B5判／2色刷・208頁　1,100円◆

[付属教材] WORKBOOK 600円◆／リスニングCD 1,500円◆
[指 導 書]　6,000円◆ <指導用CD2枚・CD-ROM1枚付>



New Edition
CROWN PLUS Level 4

使いやすくなったハイレベル新版テキスト　主対象 高2・高3

B5判／2色刷・208頁　1,100円◆

[付属教材]WORKBOOK 600円◆／リスニングCD 1,500円◆
[指 導 書]　6,000円◆ <指導用CD 2枚・CD-ROM1枚付>

Level 1　主対象 中1〜中3　952円◆
発展的言語材料、多様な読解教材を収録した検定教科書補完テキスト。

Level 2　主対象 中3〜高1　952円◆
高校英語への橋渡しのための表現と読解のテキスト

＊表示価格は本体価格　◆印は学校納入価格

三省堂 高校英語教育　2014年　夏号

●発　行 ―――― 2014年6月20日　　定価100円(本体93円)
●編集・発行人 ―――― 北口克彦
●発行所 ―――― 株式会社三省堂　●ホームページ　http://tb.sanseido.co.jp/english/
〒101-8371　東京都千代田区三崎町2-22-14
電話(03)3230-9421(編集)　振替　00160-5-54300
●イラスト ―――― 只見 優佳(ただみ ゆか)
●表紙デザイン ―――― 株式会社キャデック
●印　刷 ―――― 三省堂印刷株式会社
〒192-0032　東京都八王子市石川町2951-9　電話(042)645-6111(代)

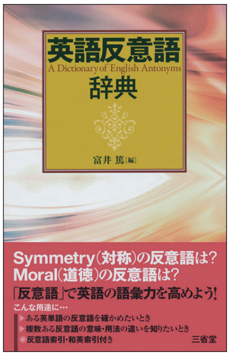
回覧

英語反意語辞典

富井 篤［編］

B6変型判　576頁　4,400円

接頭辞・接尾辞をつけて形成される反意語を集めた英和辞典。反意語が複数ある場合の意味・用法の違いを巻頭の解説で示すなど、日本人学習者向けのきめ細かさを備える。総項目数約3千。本文は接頭辞・接尾辞をつける前の肯定語を見出しとして配列。反意語をキーとする索引と和英索引を巻末に付す。



クラウン 英語イディオム辞典

安藤貞雄［編］

B6判　1,488頁　4,800円

類書中最大の総収録項目数約6万3千、用例数約5万。句義は原則頻度順表示。諺やコロケーションも幅広く収載。反意句・同意句・異形も精選して提示した。語法・文化・由来・なぞりなどの解説も充実。

クラウン 英語句動詞辞典

安藤貞雄［編］

B6判　656頁　3,600円

類書中最大の総収録項目数約1万3千、用例数約2万6千。新しい句義・用例を大幅に増補。反意句・同意句・異形も精選して提示した。句義は原則頻度順表示し、自他の区別をロゴで明示。

■ 製品紹介サイト（三省堂）
http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/dicts/english/ac2_app/

エースクラウン英和辞典 第2版 for iOS

ACE CROWN ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY SECOND EDITION

「紙の長所」＋「電子の長所」

AppStoreで
「三省堂エースクラウン」を検索！
通常価格：1,900円

Available on the App Store

三省堂　〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14　☎03(3230)9411〈編集〉・9412〈営業〉
http://www.sanseido.co.jp/　＊表示価格は本体価格